公開シンポジウム②
日本サッカーのルーツを語ろう！ part 2
ー東京高等師範学校附属中学蹴球部の100周年を機に

明治期に日本にサッカーが伝わり、東京高等師範学校（東京高師）蹴球部が起点となって全国にサッカーの“種”がまかれていった。このことは東京高師蹴球部創部120年の2016年度に開かれた公開シンポジウム「日本サッカーのルーツを語ろう!」で改めて確認された。

本シンポジウムは、サッカーの“種”と“魂”を受け取った側の学校や卒業生が、どのようにサッカーに取り組み、戦前の日本サッカーを形作っていったのかを明らかにするものである。

東京高師には附属学校が併設され、校名は変わっても、長い歴史は連綿と受け継がれている。筑波大学附属中高蹴球部の100周年を機に企画されたこのシンポジウムでは、近代スポーツの受容、部活動のはじまり、スポーツ界の組織化過程など、大戦前の日本のサッカー界、スポーツ界の状況がさまざまな角度から語られた。

いまにつながる部活動の議論がこの時代からみられるのも興味深い。

公開シンポジウム2023-2報告（月例サロン通算325回）

日本サッカーのルーツを語ろう! part 2

東京高等師範学校附属中学蹴球部の100周年を機に

関　　佳史　（一社）神奈川県サッカー協会会長／湘南高校 OB
石坂　友司　奈良女子大学研究院生活環境科学系教授（スポーツ社会学）
中塚　義実※　NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭（※コーディネーター兼）

【主　催】特定非営利活動法人サロン 2002
【後　援】日本部活動学会、桐窓サッカー倶楽部、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ
【協　力】日本サッカー史研究会、日本ヤタガラス協会
【日　時】2023（令和 5）年 11 月 23 日（木祝）　14：30 ～ 17：00　（14：00 受付開始）
注）17：00 ～ 19：00　同会場で懇親会
【会　場】筑波大学附属高等学校「桐陰会館」　〒 112-0012　東京都文京区大塚 1-9-1
注）オンラインでも参加できます（参加申込された方に Zoom の URL をお送りします）
【登壇者】関　　佳史　（一社）神奈川県サッカー協会会長／湘南高校 OB
石坂　友司　奈良女子大学研究院生活環境科学系教授（スポーツ社会学）
中塚　義実※　NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭（※コーディネーター兼）
【参加費】1,000 円（サロン 2002 ファミリーは無料です）
【参考資料】NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2016
「日本サッカーのルーツを語ろう！ －東京高等師範学校の足跡を中心に」
https://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2016_sympo.pdf

＜公開シンポジウム 2023-2 参加者【最終版】　計 30 名（敬称略）＞

■対面参加（計 26 名）　※懇親会参加は 21 名

＜サロン 2002 ファミリー（8 名）＞

赤坂修（阪南大学）、石原俊秀（スポーツ施設業者）、大河原誠二（筑附高 106 回卒）、熊谷建志（少年サッカー指導者）、関秀忠（筑附高 104 回卒／ NPO サロン 2002 理事）、中塚義実（筑附高教諭／ NPO サロン 2002 理事長）、皆川宥子（筑附高 122 回卒）、吉原尊男

＜サロン 2002 ファミリー外（18 名）＞

・登壇者（2 名）…関佳史（湘南高校 OB ／神奈川県サッカー協会会長）、石坂友司（奈良女子大学）
・筑波大学蹴球部同窓会茗友 SC（3 名）… 菅原恭一（秦野総合高校）、藤塚久雄（湘南高校 OB）、細川千太朗（筑附高 127 回卒）
・桐窓サッカー倶楽部（附属中高蹴球部同窓会）（3 名）…菅原博（会長・東教大附高 78 回卒）、留岡伸一（東教大附高 80 回卒）、木田圭亮（筑附高 103 回卒）
・日本サッカー史研究会（3 名）… 国吉好弘（フリーランス）、佐藤真成、山内博之

・日本オリンピックアカデミー（１名）… 真田久（筑波大学特任教授）
・紫礫会：小石川高校サッカー部 OB 会（４名）… 大多和求、越部良一、平沢勝美、山田和範
・その他（２名）… 関口雄飛（日本体育大学）、山口正（筑波大附属中元教諭）

■オンライン参加（4 名）

※サロン 2002 ファミリー（３名）… 茅野英一（かながわクラブ／NPO サロン 2002 監事）、
小池靖（在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者／NPO サロン 2002 監事）、
橘和徳（富山中部高校／茗友 SC）
※サロン 2002 ファミリー外（１名）… 糸井翔子（在ドイツ Sc1959Dortelweil）

＜進　行＞

14：30 ～ 14：40	主催者挨拶・登壇者紹介
14：40 ～ 15：15	プレゼン①日本サッカーのルーツ校　中塚義実
15：15 ～ 15：50	プレゼン②神奈川県立湘南高校の 100 年　関　佳史
	休　憩
16：00 ～ 16：35	プレゼン③「野球害毒論争」とサッカー　石坂友司
16：35 ～ 17：00	ディスカッション
17：30 ～ 19：00	同会場にて懇親会

公開シンポジウム②
日本サッカーのルーツを語ろう！
part2
ー東京高等師範学校附属中学蹴球部の100周年を機に

主催者挨拶

中塚：「日本サッカーのルーツを語ろう part2 －東京高等師範学校附属中学蹴球部の 100 周年を機に」にお集まりいただき、誠にありがとうございます。本シンポジウムを主催する NPO 法人サロン 2002 理事長の中塚義実です。どうぞよろしくお願いします。

私の勤務校は筑波大学附属高校です。また、私の母校は筑波大学。ということで、今回のテーマは自分自身のあゆみを確認する機会でもあります。

日本サッカーのルーツを探ろうとすると、部活動のはじまりに行き着きます。部活動をめぐる今日的課題を考えるうえで有益であろうということで、日本部活動学会にご後援いただきました。このほか、筑波大学附属中・高蹴球部の卒業生組織である桐窓サッカー倶楽部、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブにもご後援をいただきました。日本サッカー史研究会と日本ヤタガラス協会は告知にご協力くださいました。ありがとうございます。

本日の登壇者をご紹介します。一般社団法人神奈川県サッカー協会会長、湘南高校の OB でいらっしゃいます関佳史さんです。湘南高校は 2021 年が創立 100 周年で蹴球部も創部 100 周年を迎えられました。筑波大学附属高校とは戦後すぐから毎年、定期戦をする関係です。もうひと方は奈良女子大学研究院生活環境科学系教授、スポーツ社会学がご専門の石坂裕司さんです。石坂さんには後ほど、野球害毒論とサッカーと題してお話いただきます。ちなみに石坂さんは 20 年ほど前、本校で保健体育科の非常勤講師をされていました。

進行案は前ページのとおりです。いま主催団体挨拶が終わったところです。続いて進行役兼演者の一人として、中塚が話をさせていただきます。今回のシンポジウムの Part1 を 2016 年、東京高師蹴球部の創部 120 年で開きました。そこで確認されたことを振り返りつつ、もう一つのルーツ校－東京高師附属中学蹴球部の話をします。続いて関さんから湘南高校のお話をいただき。10 分間の休憩を挟んで石坂さんから、野球害毒論とサッカーについて、最後に全体でディスカッションしたいと考えています。終了後は同じ会場で懇親会です。

では石坂さんと関さんからはじめにひと言、自己紹介いただけますか。

関　：関と申します。湘南高校は 1921 年の学校創立と同時にサッカー部ができました。100 周年にあたって記念誌をつくったり番組を作ったりしました。今日は「神奈川県立湘南高校－東京高師から受け継いだもの」とテーマでお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

石坂：こんにちは、石坂と申します。私の最近の研究テーマはオリンピックの遺産についてです。東京大会が終わったばかりですが、メガイベントが地域にどのような影響をもたらすかということを研究しています。ちょうど 20 年前の 2003 年に、野球害毒論についての論文を書きました。その論文を書いた頃は野球とボートのことしか考えていなかったのですが、サッカーにも影響を与えているのではないかという仮説が中塚先生から示されまして、今回お呼びいただきました。急作りの資料ではありますが、話をさせていただきたいと思います。

プレゼン① 日本サッカーのルーツ校（中塚義実）

1．日本サッカー殿堂掲額者

2016 年 12 月に桐陰会館で「日本サッカーのルーツを語ろう」を開きました。ルーツ校とは東京高等師範学校（東京高師）のことです。戦前は東京文理科大、戦後は東京教育大、そして筑波大学につながる学校からは、現時点で 5 名の方がサッカー殿堂入りされています。

坪井玄道さんは日本にフットボールを初めて書籍の中で紹介された方です。東京高師蹴球部の初代部長です。

内野台嶺さんは日本サッカー協会創設に尽力され、JFA のシンボルマークもこの方が定められたということです。漢文の先生で、東京高師附属中でも教壇に立っておられました。

多和健雄さんは学校教育の中にサッカーをしっかり位置づけられた方。小澤通宏さんは 1964 年の東京オリンピック前後、東洋工業全盛期の名選手で、広島サッカーの発展に力を注がれた方。高田静夫さんは国際審判員として初めて FIFA ワールドカップで主審を務められた方です。来年度の殿堂には成田十次郎先生を推薦しようと動いているところです。

今日のメインは、東京高師附属中のほうです。附属 OB も 5 名が殿堂入りされています。

今村次吉さんは日本蹴球協会初代会長。島田秀夫さんは第 7 代会長で、J リーグ創設時の会長です。

日本サッカー協会 HP

新田純興さんは、後でまた出てきますが、日本サッカー協会立ち上げ時に、まだ学生だった新田さんがかなり力を尽くされました。新田さんのお宅で何度も何度もミーティングが開かれ、日本サッカー協会、当時は蹴球協会ができました。1921 年のことです。

鈴木重義さんは 1936 年のベルリンオリンピックの日本代表監督です。早稲田サッカーの創始者として有名です。

諸橋晋六さんはもっとも最近サッカー殿堂入りをされた方です。BBC から映像を入手し、三菱ダイヤモンドサッカーをはじめる道を切り開いた方で、2002 年 FIFA ワールドカップ招致活動で世界中を飛び回って日本をアピールされました。49 回卒業生です。いまの高校 3 年生が 132 回生なので、いつごろの方なのかがおわかりいただけるかと思います。

2．日本サッカーのルーツ校　①－東京高等師範学校　②－東京高等師範学校附属中学校

1）日本へのサッカーの伝来

まずは Part1 の復習をしておきたいと思います。

右図は、1874 年にロンドンで紹介された横浜の様子です。富士山が見えています。そこで外人さんが「押しくらまんじゅう」をしています。おそらく塊の中にボールがあり、奪い合っている。つまりフットボールやっているところでしょう。サッカーなのかラグビーなのかは何とも言えません。外国人がプレーしているのを和服姿の日本人が珍しそうに見ているところです。このような風景が、横浜や神戸の外国人居留地周辺でみられました。1863 年の FA 設立から約 10 年しかたっていない横浜での光景です。

日本へのフットボールの伝来を整理します。外国人居留地にクラブが生まれます。これは外国人のためのクラブですが、軍人や教師によって様々な近代スポーツが日本人に紹介されます。サッカーは明治 6（1873）年に紹介されたとされています。しかし日本人の間に広がっていったのは教育機関を通してでした。教育制度が整備され、体操の授業が必修となりました。いまでいう体育です。体操の先生を育てる学校として体操伝習所ができ、これがいまの筑波大学体育専門学群につながっていくわけです。

日本へのフットボールの伝来

◆外国人居留地に“クラブ”が生まれる
1868（明治元）年　YC&AC（横浜外人クラブ）
1870（明治3）年　KR&AC（神戸外人クラブ）

◆軍人や教師によって近代スポーツが紹介
1872（明治5）年　野球伝来
1873（明治6）年　サッカー伝来

◆教育制度が整えられ、「体操」が導入される
「体操伝習所」（1878～1885）「遊戯」紹介
1886　東京高師体育専修科に改組
1893　東京高師に嘉納治五郎校長着任！

先ほど名前が挙がった坪井玄道さんは体操伝習所の通訳で、後に主任となります。この方が海外の文献を翻訳して『戸外遊戯法』という書物にまとめ、その中でフットボールを紹介しました。

2）東京高師と嘉納治五郎

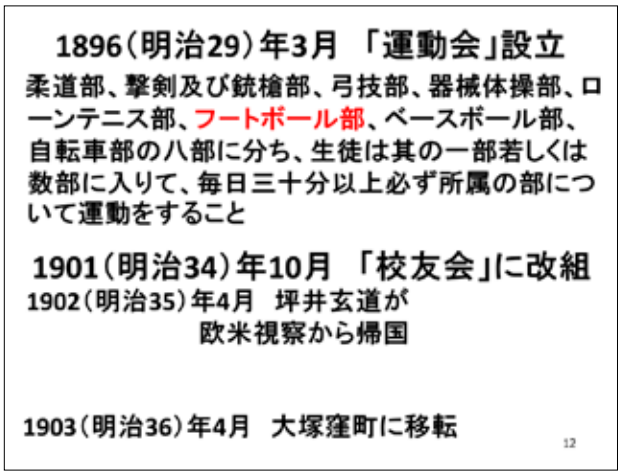
この学校に嘉納治五郎校長が着任したのが 1893 年。高等師範の校長は附属学校の校長も兼ねていました。嘉納治五郎は存知の通り、講道館柔道の創始者で、日本で最初の IOC 委員です。1912 年のストックホルムオリンピックに選手団を派遣する組織として、日本のスポーツの統括組織、大日本体育協会をつくりました。いまの日本スポーツ協会です。さらに嘉納は、このころには珍しく、多くの留学生を中国や朝鮮半島から受け入れた国際人でもありました。

この方が、長らく高等師範および附属学校の校長を務めておられました。

嘉納校長のもとで、いま日本のあらゆる学校で実践していることが試みられ、定着していきます。たとえば生徒の自治組織。「桐陰会」と名付けたのは嘉納校長です。この組織は、いまでいう部活動の連合組織と言えるでしょう。校長自ら会長となり、桐陰会野球部、桐陰会柔道部、桐陰会蹴球部というように、各部は桐陰会というクラブの中のチームでした。そして在校生だけでなく、卒業生も含めた多世代型・多種目型のクラブ組織だったのです。また、多様な学校行事がはじまります。冨浦の臨海実習。いまでも千葉県内房の冨浦に寮があり、中学生が遠泳の実習に出かけます。このほか修学旅行や運動会も、この学校がルーツと言っていいでしょう。NHK の大河ドラマ「いだて

ん」でも紹介された長距離走の大会も行われていました。嘉納校長のもとで、東京高師の学生も、附属中の生徒たちも、とても活発に過ごしたということです。

嘉納治五郎が着任したころ、高等師範は、いまの御茶の水駅前にありました。東京医科歯科大学があるところです。お茶の水女子大もここにありました。筑波大学関係者の同窓会組織「茗渓会」の名前の由来は、きれいな水が流れる谷のことで、きれいな水とは神田川です。いまはあまりきれいとは言えませんが、このころは景勝地だったようです。



1896 年に嘉納校長の提唱で「運動会」が設立されます。高等師範の卒業生は、全国各地の旧制中学校や師範学校に教師として赴任します。血気盛んな年代の青年を指導する教師たる者は、座学だけでなく、体を動かして鍛えなさいということです。8 つの部のうち、学生はいくつかの部に入って毎日 30 分以上運動することとされていました。部活動の始まりですね。

「運動会」に、いわゆる文化系の部活動や寄宿舎が加わり「校友会」となったのが 1901 年です。ちょうどその頃、坪井玄道先生が欧米視察から帰国され、何冊かの書物を持ち帰ります。そのタイミングで、東京高師は御茶ノ水駅前からいまの茗荷谷駅前、大塚に移転します。いまは筑波大学東京キャンパスと放送大学があるところです。戦後、東京教育大学はこの地にありました。東京教育大学が廃校となって筑波に新構想大学ができたとき、土地の半分が文京区に払い下げられ、いまは奥に文京スポーツセンターがあります。裏手にはいまも筑波大学附属小学校があり、その間の「占春園」には嘉納治五郎像が置かれています。

3）初代主将・中村覚之助と後輩たちによるサッカーの普及

文京スポーツセンターの前にあるグラウンドは、日本で初めて定期的にサッカーが行われた日本サッカーの聖地と言ってもいいところです。しかしいま、この自由広場ではサッカーは禁止されています。何とかならんでしょうか…。

そのグラウンドを仲間とともに整備し蹴球部の活動でリーダーシップをとって本格的に始めたのが、初代主将の中村覚之助です。坪井玄道が持ち帰ったいくつかの書物を翻訳してまとめ、日本で最初のサッカー専門書『Association Football』が発刊されます。

海外の文献をもとに練習しますが、実際にサッカーをやっている人と試合をやらないと、どのようなゲームなのかがわかりません。当時、実際にやっていたのは外人クラブの方々です。そこで横濱外人倶楽部、記録では「横浜アマチュアクラブ」となっていますが、いまの YC&AC に試合を申し込み、「2 軍ならやってもいいよ」と言ってもらい、日本人として初めてサッカーの試合を行いました。結果は 0—9 の完敗です。日露戦争開戦直前の 1904 年 2 月 6 日です。

試合の翌日、わざわざ神田の写真館へ行ってユニフォー

写真提供：中村統太郎

ムに着替えて撮った写真があります。中村覚之助は後列右から２人目の学生服を着ている人です。４年生で卒業間近の覚之助は、後輩のために試合ができるよう連絡調整にあたりましたが、本人は出場しなかったようです。４月から女学校の先生となり、その翌年からは嘉納校長の命により中国の学校に赴任しますが、若くして病に倒れます。中村覚之助こそ日本サッカー殿堂にふさわしいと思います。私たちはアクションを続けています。

東京高師の卒業後は全国各地へ！

赤木愛太郎は明治33（1900）年3月卒

明37(1904) 中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明38(1905) 牧野 信寿 →広島師範　伊藤長七はこの学年
明39(1906) 堀 桑吉 → 愛知第一師範
明41(1908) 細木 志郎 →埼玉師範
明42(1909) 内野 台嶺→豊島師範→東京高師
明42(1909) 落合 秀保 →滋賀師範　錦織兵三郎、成田千里はこの学年
明42(1909) 玉井 幸助 →御影師範
明44(1911) 松本 寛次 →広島一中
大 3(1914) 高橋 英治 →刈谷中　「いだてん」金栗四三の同期生
大 9(1920) 北村 春吉 →静岡師範
大10(1921) 和田 邦五郎 →東京高師附属中
大13(1924) 後藤 基胤 → 湘南中

「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、東京高師卒業生は全国にサッカーを広めた

覚之助の後輩たちは、全国各地の学校に赴任し、「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、サッカーを全国に広めました。今日の話に関係しそうな方のみ紹介します。高師附属中の漢文の先生でもあった内野台嶺さん。和田邦五郎さんは附属中蹴球部の部長をされました。後藤基胤さんは神奈川の湘南中に赴任した数学教師で、東京高師附属中の出身です。こうして全国各地にサッカーの“種”と“魂”が広がっていったのです。

蹴球部の OB でなくても、当時の東京高師の卒業生が、全国各地で校長として人事権を持ち、ユニークな学校経営をされます。湘南中学初代校長の赤木愛太郎さんは中村覚之助の少し上の先輩ですね。また筑波大附と同様、今年で創部 100 周年を迎える東京府立五中、いまの小石川中等教育学校の初代校長、伊藤長七は 1905 年卒業なので、覚之助の一級下の学年となります。附属中で英語教師をされていた方です。

つい先日、NHK の「チコちゃんに叱られる」で、静岡の志田中、いまの藤枝東高校の話を取り上げていました。初代校長・錦織兵三郎がサッカーを校技と定めて学校を運営した話です。この方も東京高師の 1909 年の卒業生です。成田十次郎先生の義理のお父さんの成田千里さんも 1909 年卒業です。豊島師範の校長をされた方で、内野台嶺さんと同時期におられたようです。高等師範を卒業し、学校長として着任した学校にフットボールを広げていく事例がたくさんあるということです。

4）世界への挑戦

東京高師の卒業生は、サッカーを全国に広めただけでなく、世界に立ち向かっていきました。中国（香港）、フィリピン、日本で始まった「極東選手権」の第３回大会ではじめて日本代表サッカーチームが出場しますが、当時、日本人でサッカーをしているのは東京高師だけですから、東京高師が日本代表として出場します。結果は、中国に 0-5、フィリピンに 2-15 と完敗です。これではいかんと首都圏、東海、関西でサッカー大会が始まるのですが、この話はあとでします。

5）附属小学校のサッカーのはじまり

このころ、東京高師に隣接する附属小学校でサッカーが始まったようです。日本サッカー殿堂掲額者でもある 24 回卒の新田純興さんが、附属小学校創立 100 周年記念誌『附属 100 年の思い出』に書かれています。1973 年の記事です。

「明治 42 (1909) 年の 1 月から 2 月にかけて、本校の蹴球部は三度在留英国人チームを連破し、東都の新聞が大々的に報道した」とのこと。「その時の高師のフルバックの一人、川崎喜一先生」が附属小学校の算術の教育実習生として来られた。子どもたちはすぐに算数ができてしまうので、「算術の代わりにフットボールを教えよう」と、サッカーの ABC から手ほどきをしてくださったとのことです。これが明治 42 ～ 43 年のことです。茗荷谷駅前の、筑波大学東京キャンパスとその裏にある附属小学校のあたりのできごとです。「高師蹴球部の寄宿舎の部室」は新校舎のすぐにあり、「我々は、それから毎日、朝 7 時にボールを借りに行って、天気なら必ずボールを蹴り、それまで建物の中だけで遊んでいたのが急に勇壮活発になった」とのことです。

附属小学校の児童は多くが附属中学に進みます。そして「中学と本校の試合を始め、やがては公式試合で中学の方が本校を負かしてしまった」、つまり附属が高等師範のお兄さんたちに勝つということが起きたわけです。小学生の頃からボールに馴染んでいたということですね。

新田さんは別のところでも、「附属小学校でも (明治) 42 年頃からフットボールをやり始めた」と書かれています。また、内野台嶺先生について、「大正 6 年、内野台嶺先生が附属の先生に戻られ附属中学のア式蹴球の指導をして下さった」とあり、東京蹴球団の創設、関東蹴球大会の開催に言及されています。

6）大正期の附属中学

大正期の附属中学のグラウンドの様子については、岡山俊雄さんが興味深い文章を残されています。

大正 5 ～ 10 年ごろ、「昼休みにもっとも広く行われていた遊びは、ゴムまりのベースボールマッチで、グラウンド全面の至るところで試合が展開されていた」。フットボールは、ボールが 1 個しかなかったこともあってか、上級生がボールを蹴り上げて遊ぶだけだったが、「いつの頃からか、生徒が思い思いに相手を見つけてジャンケンをし、負けた方が帽子をうしろ前にして敵味方に分かれ、ベースボールをやって

附属小のサッカーのはじまり

明治42(1909)年の1月から2月にかけて、本校の蹴球部は三度在留英人チームを連破し、東都の新聞が大々的に報道したという事があったそうです。その時の高師のフルバックの一人川崎喜一先生というのが、43年1月に私共の算術の教生として指導して下さったのでしたが、同級生一同がバリバリと問題を処理してしまうので、算術の代りにフットボールの事を教えようと、今日でいうサッカーのABCから手ほどきをして下さいました。

高師蹴球部の寄宿舎の部室というのは、新校舎のすぐ下です。新しい智識を授かった我々は、それから毎日、朝七時にはボールを借りにいって、天気なら必ずボールを蹴り、それ迄建物の中だけで遊んでいたのが急に勇壮活溌になりました。この仲間が附属中学に進むと、中学と本校の試合を始め、やがては公式試合で中学の方が本校を負かしてしまったという記録を樹立するようになるのです。

「一ツ橋から大塚へ」新田純興氏（24回）の寄稿

18

『附属百年の思い出』1973年1月発行　※附属小100周年記念誌

附属サッカーの誕生

高等師範の卒業生が全国の師範学校へ赴任しフットボールが自然と伝わっていき、附属小学校でも42(1909)年頃からフットボールをやり始めたと思う(注：新田さんは小学6年生)。

（中略）豊島師範へ高等師範の内野台嶺先生が赴任され、永く日本のフットボール界のため尽力されることになった。高等師範に入学してきた中華民国、韓国、台湾出身の留学生がグラウンドでプレーするのを、若い附属の連中が真似し新しい技術を身につけるようになり、大正6(1917)年内野台嶺先生が附属の先生に戻られ附属中学のア式蹴球の指導をして下さった。この年、芝浦の埋立地で日本代表としてサッカーに出場したが、中国、比国に大敗した。これが転機となりクラブ組織のサッカーチームをつくることになり、高等師範、青山師範、豊島師範の卒業生で東京蹴球団が作られ、サッカーの指導や宣伝試合を行った。大正7(1918)年には関東蹴球大会を開き、一般組と中等学校と二種類に分けて試合が行われた。

「附属サッカーの誕生」新田純興氏（24回）の寄稿

19

『附属中学　サッカーのあゆみ』1984年5月発行　※60周年記念誌

大正期の附属中の校庭のようす①

大正5年から10年(1916～21)へかけての私の在学中、昼休みにもっとも広く行われていた遊びは、ゴムまりのベースボールマッチで、グラウンド全面の至るところで試合が展開されていた。遊び道具としてのフットボールは、もっぱら、ほぼ胸の高さに挙げた手のひらのボールを軽く投げ上げ、落ちてくるところを高く蹴り上げるという遊び方で、ボールが1個しかなかったから下級生はその仲間に加わりにくかった。地面に置いた球を水平方向に蹴るというやり方は、私が下級生のころには、放課後にも多分まだ行われていなかった。

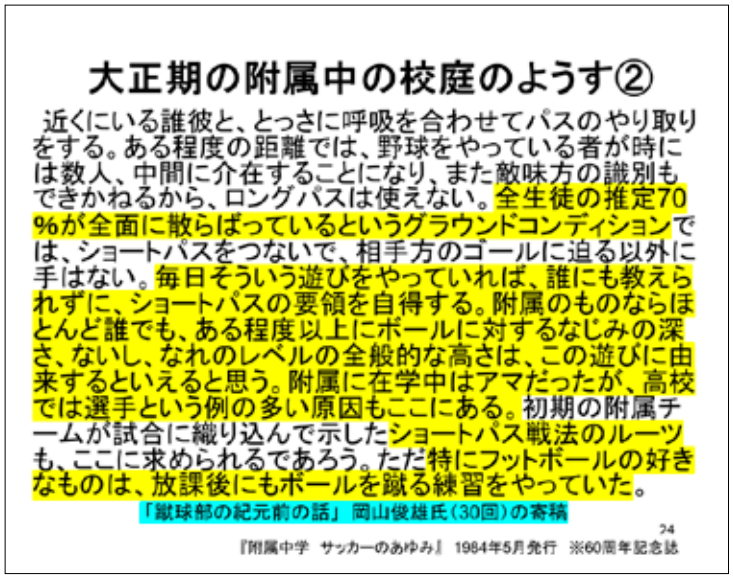
それがいつの頃からか、生徒が思い思いに相手を見つけてジャンケンをし、負けた方が帽子をうしろ前にして敵味方に分かれ、ベースボールをやっている間を縫いつつ、相手側のゴールを狙うという、不特定多数による試合形式の遊びが、ベースボールに匹敵するくらい盛んになった。

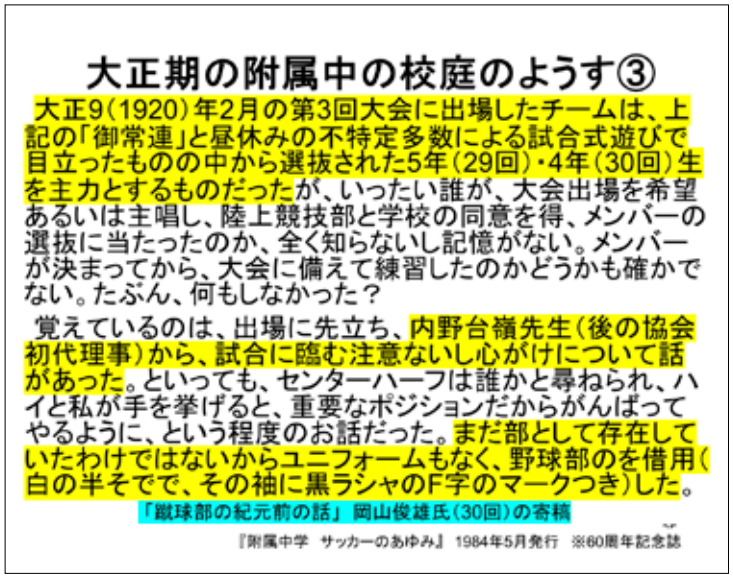
「蹴球部の紀元前の話」岡山俊雄氏(30回)の寄稿

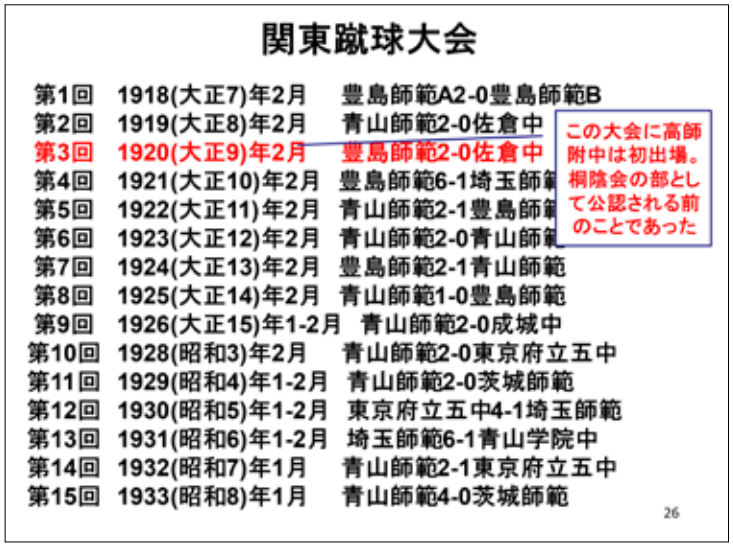
『附属中学　サッカーのあゆみ』1984年5月発行　※60周年記念誌

いる間を縫いつつ、相手側のゴールを狙うという、不特定多数による試合形式の遊びが、ベースボールに匹敵するくらい盛んになった」そうです。

戦前は男子しかいませんが、「全生徒の推定70%が全面に散らばって」フットボールのゲームを何組も同時にやっていたのが大正期の附属中の校庭です。「毎日そういう遊びをやっていれば、誰にも教えられずに、ショートパスの要領を自得する。附属ものならほとんど誰でも、ある程度以上にボールに対するなじみの深さ、ないし、なれのレベルの全般的な高さは、この遊びに由来する」「附属に在学中はアマだったが、高校では選手という例の多い原因もここにある」というのは、正式には入部しなかった者が、旧制高校に進学して各部の中軸になっていくことを示しています。







7）公式大会初参加（1920年）

そのうち大会が整備され、もっとやりたい者がチームをつくって出場するようになります。「大正９年の第３回大会に出場した」というのが、附属中が初めて公式大会に出場した関東蹴球大会の話です。正式な部として公認される前のことです。「陸上競技部の同意」というのは、当時の桐陰会では陸上で運動する部が「陸上運動部」としてくくられていたことによるものでしょう。岡山さんの文章には「覚えているのは、出場に先立ち、内野台嶺先生から、試合に臨む注意ないし、心がけについて話しがあった。といっても、センターハーフは誰かと尋ねられ、ハイと私が手を挙げると、重要なポジションだからがんばってやるように、という程度のお話だった」とあります。部として公認されていないので、野球部のユニフォームを借りたそうです。

8）桐陰会の部として公認＝創部（1924年）

ただし、繰り返しますが、このときはまだ正式な部ではありません。大会出場が認められ、創部に至る経緯については。岡山さんの一級上の井染道夫さんが書かれたものがあります。明治大学サッカー部の創設者です。

「当時附属には蹴球部はなかったし、ぜひ作りたいと宮下丑太郎先生に相談したり御願いしたりしたがどうしても許可されずに年は経って行った。私が５年生の時、漸く願がかなって」出場が認められたということです。創部

前の話です。

今年は蹴球部の創部 100 周年としていますが、それは「桐陰会」の部として公認されて 100 周年ということです。明治 23（1890）年に設置された校友会が明治 30（1897）年に嘉納治五郎校長のもとで「桐陰会」として再編され、課外活動を重視します。蹴球部創部の頃は、陸上で運動するグループが陸上運動部にまとめられており、そこから陸上部、野球部、蹴球部に分かれていったようです。

サッカー部のこと

二十九回　井染道夫

桐陰のサッカー部も輝く歴史を三十七年持っている。私が中学三年生の頃、東京蹴球団主催の関東中等学校蹴球大会が高師校庭で一月から二月十一日決勝というスケジュールで開かれた。当時附属には蹴球部はなかったし、是非作りたいと宮下丑太郎先生に相談したり御願いしたりしたがどうしても許可されずに年は経って行った。そして私が五年生の時漸く願がかなって、大正九年一月第三回関東中等学校蹴球大会に初の参加が許可された。主力は五年生であった。当時は豊島師範、青山師範が中等学校の双璧であり、高師ですら彼等には対等であった。もちろんこの二校は相互に優勝しているし参加をしていた。暁星、成城、豊山、青学、独協、目白の中学校も加わって、附属は第一回戦に豊島師範と闘った。当時の豊島は守屋星野など一流選手を持っていただけに附属の勝利などだれが予想しただろうか。愈々開戦となると、さすがは豊島だ、よく球を出して両翼から攻めて来る。CH守屋の長身を利しての攻防は大会随一の評であっ

東京教育大学附属中学校・高等学校『創立七十周年』1959年3月18日発行　p.70

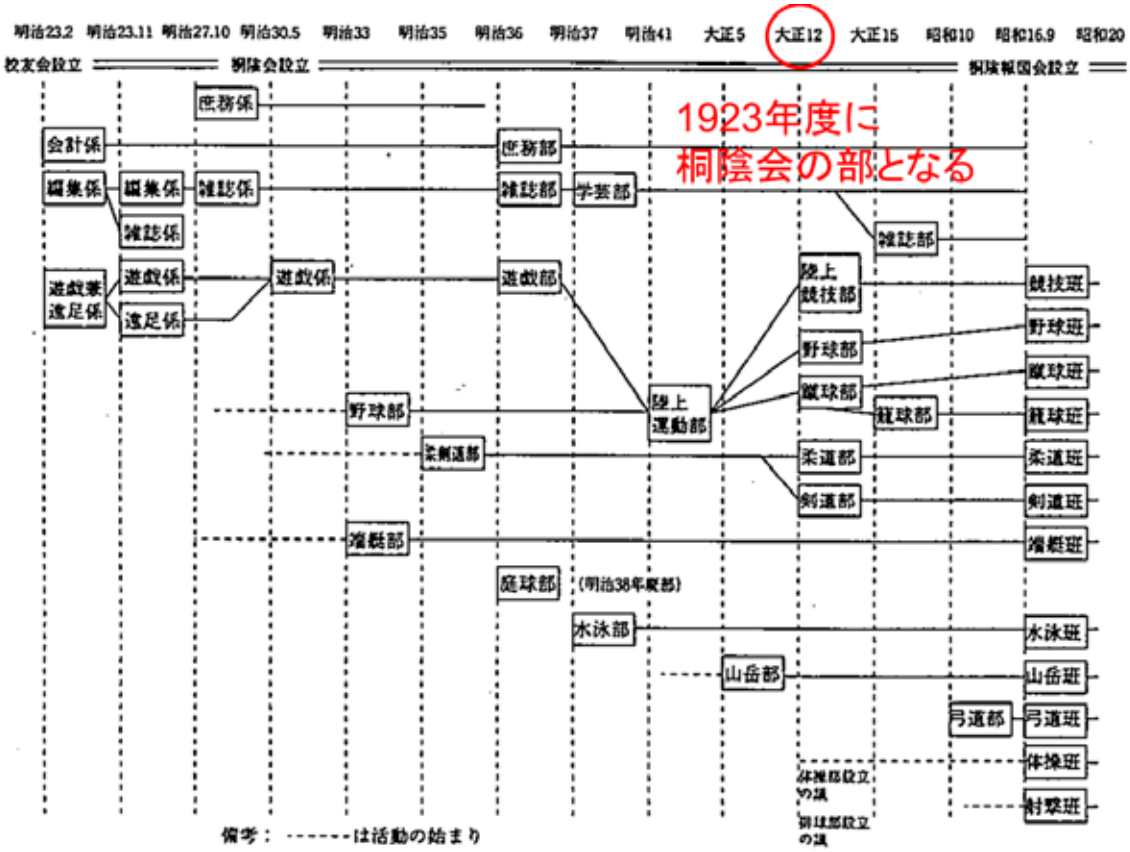


図 1　東京高等師範学校附属中学校の課外活動組織の変遷

筑波大学附属中学校・高等学校『創立百年史 1888 ～ 1988』

9）チョー・ディンと附属中

附属中ではかなり早い段階からサッカーに触れていたことがおわかりいただけたと思いますが、ビルマ、いまでいうミャンマー人のチョー・ディンさんとの関わりを忘れてはなりません。日本サッカーにとってもとても大きなものでした。先日行われたFIFAワールドカップ予選で日本はミャンマーに圧勝しましたが、戦前はビルマからものすごく学んだのです。チョー・ディンさんは日本サッカー殿堂入りされています。

1930年極東選手権日本代表でもあった春山泰雄さんが「棺桶の中にも持って入りたい思い出」として書かれているものがあります。井染さんと同期の30回卒業生の鈴木重義さん、この方は早稲田サッカーの創始者で1936年のベルリンオリンピック日本代表監督ですが、この先輩に紹介してもらったと書かれています。イギリスの植民地だったビルマではフットボールが盛んで、チョー・ディンさんはスコットランド人から教わったと書かれていました。鈴木さんがいる早稲田で、また鈴木さんの母校である東京高師附属中の校庭で、子どもたちと一緒にボールを蹴り、フットボールを教えてくれたようです。その成果は『How to Play Association Football』という本にまとめられ、本の中では春山さんはじめ、そのころの附属中学生がモデルとして出てきます。

この本が世に出たのが100年前の1923年8月。出版1ヶ月後の9月1日が関東大震災です。「まさに地軸をひっくり返す大地震」と書かれています。9月1日の始業式後、ホームルームも終わって先生方は職員会議中。春山さんをはじめとするサッカー好きが、校庭で「練習を楽しんでいる最中」に地震が起きたということです。すごくリアルな話が残されています。

未曽有の大地震のため、チョー・ディンの留学先の蔵前工業、いまの東京工業大学は、校舎が崩れて授業ができなくなってしまいます。そのおかげと言ったら変ですけど、チョー・ディンの全国行脚がこれを機に始まりました。神戸一中がチョー・ディンからショートパスを学んだ話を、世界最高齢ジャーナリストの賀川浩さんが書かれていますが、その話につながります。

春山さんの手記を続けます。「サッカー生活の方は中学の締めくくりで、大正13（1924）年1月、

チョー・ディンと附属中①

オーバーに云えば、棺桶の中にも持って入りたい思い出は、ビルマ人、チョー・ディン（KYAW. DIN）氏から受けた指導の数々である。彼は東京高等工業学校（蔵前→東京工業大学）への留学生として大正11（1922）年に来日している。彼が高師グランドに現われ、近代サッカーの手ほどきをしたのは同年秋ごろだったと思う。

彼と私達との縁結びの神様は、今は故人の30回卒の鈴木重義氏のような気がする。チョー・ディン氏はハイジャンプも得意としており、何かの縁で来日早々、早大グラウンドでジャンプ練習に行ったとき、早稲田高等学院のサッカーの練習を見て、コーチ役を名乗り出たが、これを大歓迎したのが、当時同学院の主将鈴木重義氏である。コーチのご利益あらたかに、同学院はインターハイで大正12年、13年と第1回、第2回に連覇している。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

チョー・ディンと附属中②

さすがは鈴木先輩である。後輩達にご利益のお裾分けをしてやろうと、チョー・ディン氏を私達に紹介してくれたのである。キックの基本はインステップであること。これは野球でいえば直球。次はサイドキックの効用の数々、直球に対して、これは変化球か。パスにシュートにこれを用いて効果てき面。私のプレイは一回りも二回りも幅を増したに違いない（中略）。

そんな彼が大正12（1923）年8月、蹴球の指導書（How To Play Association Football）を出版したのである。小生、34回の本田長康、真鍋良一両君も色々と協力し、タックルされたり、ドリブルで抜かれたり。主役は勿論チョー・ディン先生。こちらは生徒で、ああでもない、こうでもないと注文をつけられ、出来上がった写真の数々が同書の中に掲載されている。グラウンドは勿論東京高師である。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

チョー・ディンと附属中③

この本が出版された約1か月後が、あの9月1日の関東大震災である。始業式のあと蹴球気狂の小生、同級の児島英三君、四年の本田、真鍋の両君達と練習を楽しんでいる最中。午前11時58分。縦揺れと横揺れが噛み合う、まさに地軸をひっくり返す大地震。校舎の反対のゴールポストの裏にある二階建て図書館の屋根瓦が何百枚、何千枚と落ちるさまは恐怖の限りである。唖然と立ちすくんでいる時、息せき切って走ってきたのが、いつも御厄介になっている小使の原さん。“坊ちゃん達しゃがんで”と“転ぶと中気になりますよ”と教えられた。地震にも驚いたが、職員会議の最中で一番に校舎の外に走り出て来たのは、新婚早々の寺西武夫先生。転んで中気にならないかと心配したものである。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿 31

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

チョー・ディンと附属中④

サッカー生活の方は中学の締めくくりで、大正13（1924）年1月、東京高師グラウンドで行われた第3回全日本選手権大会東部予選である。（中略）1回戦で全高師を2対0で破ったのは全くの大金星。子供心に憧れていたお兄さんチームに勝ったのだから、喜びこの上なし。相手のCH竹内虎士氏は名に負う名選手。狙った獲物は外さないという男だが、こちらはチョー・ディン直伝の三角型パスがある。子供達にショートパスでちょこまかと動かれたのでは大の男達もやりにくかったであろう。第2回戦は水戸高を破った埼玉師範と対戦。これを1対0で負かして準決勝戦へ。相手は第1回インターハイ優勝の早高を破って意気上がる豊島師範。3対2の1点差。悔いの残る試合だったような気がする。

「思い出すサッカー」 春山泰雄氏（33回）の寄稿 34

『附属中学 サッカーのあゆみ』 1984年5月発行 ※60周年記念誌

東京高師グラウンドで行われた第３回全日本選手権大会東部予選である（中略）。１回戦で全高師を２対０で破ったのは全くの大金星。子供心に憧れていたお兄さんチームに勝ったのだから、喜びこの上なし」。いまでいう天皇杯予選で、附属中高生が筑波大学に勝ったということです。そのころは同じグラウンドを使っていて、お兄さんたちをいつも見て憧れていたので、さぞかし嬉しかったことでしょう。チョー・ディン直伝のショートパスに、お兄さんたちがてんてこ舞いだったという話です。

10）日本代表の躍進と附属中

春山さんたちが選ばれたこのときの日本代表チームは、初めて全国から選抜された選手で構成されたチームです。1930 年の極東大会でフィリピンに勝ち、中国とは引き分けたものの、初めてアジアの大会で優勝します。JFA のシンボルマークが決まったのはこの翌年です。

日本サッカーミュージアム所蔵

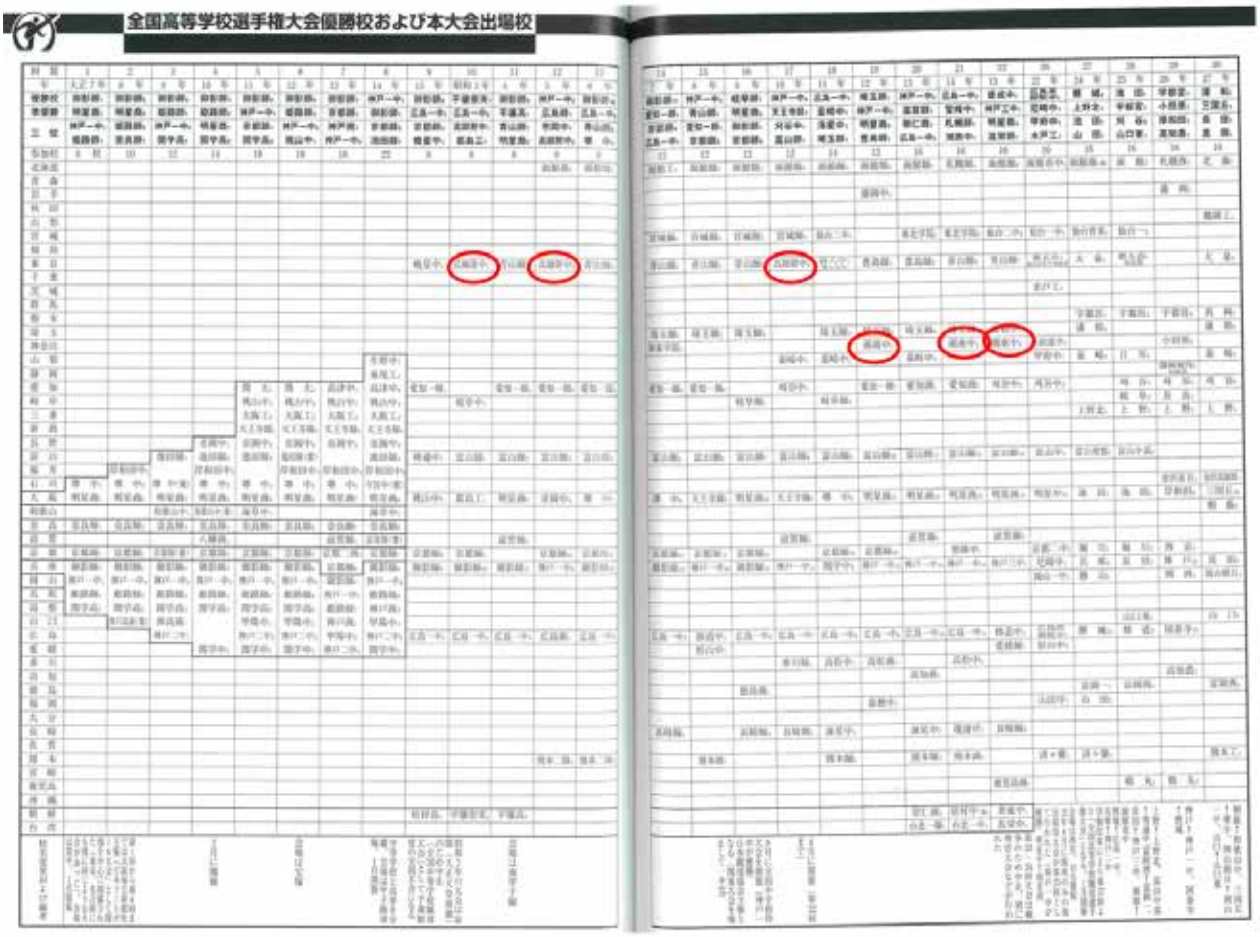
1930 年極東選手権のメンバーは、ほとんどが東京帝国大学出身です。いまの東京大学の全盛期ですね。彼らの出身高校・出身中学までさかのぼると、監督は東京高師附属中の鈴木さん、選手には春山泰雄、本田長康、近藤台五郎の３名が東京高師附属中から選ばれています。神戸一中からも４名選ばれています。社会階層的にエリートとされる人たちが、旧制中学、旧制高校、帝国大学でサッカーをやっていた時代であり、学校の部活動の中で、選手やチームが育っていたことがわかります。

戦前の中学サッカー、いまのお正月の高校選手権の出場校一覧をみると、どこがサッカーをやっていたのかがよくわかります。附属中は戦前、３回出場しています。神奈川と山梨は一枠しかなく代表決定戦をやっていましたが、予選を勝ち上がった湘南も戦前に３回、出場しています。

第９回極東選手権優勝メンバー

ポジション	氏　名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場 フィリピン	試合出場 中華民国
監督	鈴木 重義	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	-	-
FW	春山 泰雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○	○
	若林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽	▽
	手島 志郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
	篠島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校尋常科	東京高校	東京帝国大	○	○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○	○
	市橋 時三	1909(明治42)年6月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△	△
HB	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽	○
	竹腰 重丸	1906(明治39)年2月15日	天王寺中	山口高校	東京帝国大	○	○
	野沢 正雄		広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
FB	竹内 悌三	1908(明治42)年11月6日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○	○
	井出 多米夫	1908(明治42)年11月27日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△	
	後藤 靭雄		関西学院中		関西学院大	○	○
GK	斉藤 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○	○
sub							
HB	西村　清		神戸一中	松山高校	京都帝国大		
	大町　篤				東京帝国大		
FB	杉村 正二郎	1907(明治40)年8月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大		
	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大		
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大		
GK	阿部 鵬二	1909(明治42)年1月27日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大		

注）試合出場欄は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場



『高校サッカー年鑑 2021』講談社

11) 卒業後は各大学にサッカー部を創設

附属中の卒業生は、進学先や就職先など、行った先々でサッカー部を作ります。東京帝大、早稲田、明治、立教などがそうです。37 回卒業生の市田左右一さんは在学中はサッカー部ではありませんが、卒業後、いろんな繋がりで FIFA の理事までされた方です。

1936 年ベルリンオリンピックの日本代表主将・竹内悌三さんは、附属中とともに 2024 年に 100 周年を迎える府立五中、いまの小石川高校の卒業生です。長女の石井幹子さんは世界的な照明デザイナーとして有名ですが、ご子息は「2 人の息子には附属でサッカーをさせる」という父の遺言どおり、二人とも附属のサッカー部で活躍されました。嘉納治五郎校長の全人教育が伝統として根付いていた附属中で、二人の息子にはサッカーをさせたかったという父親の願いはかないましたが、竹内悌三さんはシベリア抑留中に帰らぬ人となりました。

もう一つのルーツ校 東京高師附属中

氏　名	卒業年	卒業回	卒業後の動向
★今村 次吉	明治30(1897)	第6回	東京帝大。大日本蹴球協会初代会長
★新田 純興	大正4(1915)	第24回	旧制一高、東京帝大でサッカー部創設。大日本蹴球協会創設に尽力
井染 道人	大正9（1920）	第29回	明治大でサッカー部創設
中島 道雄			旧制水戸高でサッカー部創設。のち東京帝大
★鈴木 重義	大正10(1921)	第30回	早稲田大でサッカー部創設。ベルリン五輪代表監督
峯岸 正雄			立教大でサッカー部創設
岸本 英夫			東京帝大ア式蹴球部で活躍
斉藤 久敏	大正11(1922)	第31回	慶應義塾でソッカー部創設
春山 泰雄	大正13(1924)	第33回	旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
本田 長康	大正14(1925)	第34回	早稲田大。日本代表として活躍
近藤 台五郎			旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
西川 潤之	大正15(1926)	第35回	法政大。日本代表として活躍
竹内 至			旧制新潟高でサッカー部創設。京都帝大卒業後、東京瓦斯サッカー部（現FC東京）創設
市田 左右一	昭和3(1928)	第37回	旧制広島高から九州帝大卒。1958～1962FIFA理事
★島田 秀夫	昭和8(1933)	第42回	東北帝大卒。日本サッカー協会第7代会長
★諸橋 晋六	昭和15(1940)	第49回	上智大卒。元三菱商事会長。2002年招致委員会副会長。「三菱ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞｻｯｶｰ」を紹介。

★は日本サッカー殿堂掲額者

12) 神戸一中、広島一中

そろそろ時間ですが、少しだけ他校の紹介を。

神戸一中も、少し時期はずれますが、似たような状況でした。「野球部があまり厳しいもんだから、フットボールの方に集まってきた」「一中は伝統的に野球部が強かった」「野球部の選手をすれば必ず落第する」。だからサッカーに移ったという話です。

神戸一中　蹴球のはじまり

毎日昼の時間にボカンと遊んで居っても仕方がない、フットボールをやろうじゃないかというのでけり出したのが大正元年位でした。その時にはただ上に蹴るだけです。両方から上に蹴っていたのです。そこへ岩田、アガール先生がやってきて教えてくれた、クラスの試合は度々やった。四年と五年、三年と四年というようにやっていた。大正3(1914)年になって初めてピックアップチームができた。全級から三年の人も入れ、四年、五年を混ぜてやったのです。

対外試合は、一番初めにやりましたのが確かクリケット倶楽部の第二選手だったと思います。大きなスコアーで負けました。エリオンに教えてもらったのが信用し得るようなコーチの初です。その頃他所と試合の出来るのは兵庫県下では御影師範一校、大阪では明星商業が相当強いという話でした。外では広島一中…

第2回座談会(昭和9年9月1日)における三宅弘起氏の発言

『神戸一中蹴球史(復刻版)』2011年2月発行／元は1937年11月発行

神戸一中　野球とサッカー

私どもの時分、こういう傾向があった。一中の野球部が非常に強かった。西村、三宅君なんか野球をやっていた時分…。久保田三治君が主将をしておった時分、先輩が出てきて、それこそ火の出るような練習をした。私なんか野球の練習等やる気が出なかった。とにかくフリーバッティングをやる時でも「なんじゃ今の打ち方は」と非常に激しいやり方でやられて、学校の選手になると恐ろしい練習をやらされるので野球部の選手に引っ張られることを嫌がった。私のクラスには野球部の選手よりも野球のうまいものが居りました。別所、岩井、有村、米谷、高山。野球部があまり厳しいもんだから、フットボールの方に集まってきた。

第3回座談会(昭和10年1月22日)における範多龍平氏の発言

『神戸一中蹴球史(復刻版)』2011年2月発行／元は1937年11月発行

神戸一中　野球とサッカー

私達のクラスにもあった。一中は伝統的に野球部が強かった。一中に転向しまして野球部の選手をすれば必ず落第する。落第しなければ乙というぐらいだった。選手と言えば一、二年落第した。私達は一年練習に行ってやめてしまった。練習は相当激しく、晩暗くならんと帰られぬ。それからこつこつ歩かされて、電気がつくようになっておごってもらって帰った。野球オンリーというようなものであって、運動第一だけれども、落第するのはかなわぬ。野球部に残っているのは極く趣味を持つ連中だけで、他の者は嫌だといってみなやめよった。

第3回座談会(昭和10年1月22日)における相川氏の発言

『神戸一中蹴球史(復刻版)』2011年2月発行／元は1937年11月発行

もう一つ。こちらの一中は広島一中、いまの国泰寺高校です。野球がエスカレートしすぎたので、当時の校長先生が野球部の対外試合を制限します。それが野球だけでなくサッカーにも波及して、せっかく全日本選手権の予選で勝ち上がったのに本大会に出場できなかったということです。あとで出てくる野球害毒論争とも関係してきます。

13) 戦後の復活と日本一

戦後すぐの 1946 年 5 月、全日本選手権が復活します。大人の部の前座で中等学校の部が、東日本代表の東京高師附属中と西日本代表の神戸一中の間で行われます。附属中が 1-0 で勝ち、全国優勝しました。そのときの校内新聞です。

同じ年に第 1 回国民体育大会がはじまり、神奈川立湘南中学が優勝します。両校の年に一度の定期戦はその翌年に始まり、いまに至るまで続いています。

フェイント

一中の悲運、校則の壁に泣く

地区予選に勝利しながら、本大会は棄権。広島一中が不運だったのは1924（大正13）年２月の第３回全日本選手権大会である。１月の西部地区予選決勝で、広島高等工業と広島師範連合軍である「広島デルタ倶楽部」を２－１で振り切った。一中は全国決勝大会に進む権利を得た。

ところが、本大会を前に「校則」が立ちはだかった。06（明治39）年に着任した弘瀬時治校長は18（大正７）年、野球部の新聞社関係主催の対外試合を禁止。各運動部も学校関係主催以外の大会には出場できなくなった。「人間形成が教育の目的。芸人や運動屋、演説使いをつくることではない」との教育観からだった。野球部員らの好ましからざる振る舞いに強硬な措置を取ったのだ。

蹴球部も例外ではなかった。全日本選手権の主催者は大日本蹴球協会。新聞社ではなかったが、教育関係でもない。最高峰の大会に出場する権利がありながら、一中イレブンは欠場を余儀なくされた。公式記録には「大正13年２月２日　準決勝　アストラクラブ（棄権）広島一中」とある。

『栄光の足跡―広島サッカー 85 年史』、広島県 FA、2010 年発行

桐

第三號

發行　桐判行会
印刷　不二勝寫堂
小石川護國寺前
毎月一・十五日発行

全國制覇成る

桐陰史中最大の勝利!!

全日本蹴球選手權大会決勝戦たる我桐陰のホープ三國谷主將の率ゐる附属中學蹴球部対関西の王者神戸一中の試合は五月五日小雨の降りみ降らずみの天氣のうちに、我蹴球の地本鈴蘭大グランドに於て行はれた。我七百の熱狂的應援は選手十一の士氣を奮ひ起たせ数年間の練習の成果この一試合にかゝるとて著聞戦十一人の選手はグランドに出でた。部長三島先生を始め往年の闘將各先輩の激励の言葉を背に受け乍ら……

直前左ウイング小野原（陸上競技主將）の病気再発に三年にして俄に出場した松沢を再び起用したが、キックオフと同時に「五分一点」の傳統的戦法をそのまま松沢、三國谷の球のヘディング見事に極まり先づ一点を得精神的に我勝利を確定せしめた。我パツク陣は相変らず見事なキックを示し八ーフ陣は縦横に奮戦、RH横井のスライディングは遂に敵ウィングを圧倒負傷せしめる迄に烈しかつた。（註—試合中氣が張つてゐれば絶対に怪がをしないとのこと）一対零の得点はそのまゝ持越され、一進一退のうちにチヤンスはあつたが惜しくもシユート成らず、試合終了を告げる審判のホイツスルは鳴渡つた。全力を尽し切つた選手の顔は歓喜と感激そして興奮に充ち、応援七百の健児は絶叫を続け先輩亦夢を実現して呉れた愛すべき後輩の為にしばし感謝の声をあげる。

これだこれだッ!! 皆な見て呉れッ……激しく涙と共に差上げる我闘將三國谷の手には我桐陰の誇現十一がたつた今全精力を尽して戦い取つた全国制覇の表彰状がしつかと握られてゐる。弾丸……止まるを知らぬ興奮の渦。涙とともに固めたものは只すすりなき。皆泣いてゐる。嬉しいのだ。

さうだ、桐陰初の全国制覇だ。日本一なのだ。勝つたんだ。勝つたんだ。……

選手の気持は応援の気持と全く同じだ。応援の皆が大きく頷く。純白のユニフォームは泥にまみれ、応援の足跡が脱ぎすてられ、ちぎれた桐の記章が足許にころがつてゐる。

汗、血、そして必勝を目指す信念。そしてファイトに決ぐファイトのすべてを尽し切つた彼の姿だ。

こうして知れなくなつて選手目掛けて夢中で駆つて五年。ひとりひとりの目が光つてゐる。

「貴様、貴様!! あ、ありがたうしッ」あとは途切れて低く絶する嗚咽。

「おいッ みんな、唱はう、凱歌だッ 凱歌を唱ふんだッ!!」眼を真赤にした晩まくりの好漢米倉の絶叫。爆発した様な叫び。唱ふ。噴へる。

縦横無尽に暴れ廻つた情熱横井が胸一杯の気持を押さへ兼ねて涙と共に声をあげる。

一條一二條一と筋を引いて光り流れ。

健児七百は大地を踏みしめて唱ふ。いくたびも、いくたびも……

あゝ我勝ちぬ 我勝ちぬ

……

〔四年生新聞部編集〕

（如何）

決勝戦の経過は蹴球部々誌に掲載されてゐるから欲しい人は部員に頼んで下さい（蹴球部）

出典：東京教育大学附属高等学校、『THE TOIN 高校桐陰新聞縮刷版』
昭和 44 (1969) 年 3 月発行

14) 附属・湘南サッカー定期戦

定期戦の始まりについて湘南の小林忠夫さんが書かれたものがあります。附属は「他の種目は学習院と定期戦を組んでいるが、サッカーはぜひ湘南と」というのが始まりです。附属も湘南も戦前からの強豪で、戦後すぐ全国優勝を果たしたのは前述のとおり。また「湘南と附属は勉学を重視するといった学校の校風や環境が似ていると思われるし、そのサッカーもショートパスを中心としてチームプレーを重視するカラーのチームであり、まさに恰好の好敵手だと思われます」というのが定期戦につながったようです。

こうして戦後すぐ定期戦が始まり、72 回を数えました。コロナ禍で試合ができなかった時期もオンラインでの交流を続け、2023 年 3 月、湘南高校で 4 年ぶりに対戦しました。試合後の交流会はできませんでしたが、2024 年 3 月は附属会場で、試合と交流会を含めた定期戦を再開する予定です。

駆け足で日本サッカーのルーツ校、東京高等師範学校の復習と、もう一つのルーツ校、附属中学のところをあわせてご紹介させていただきました。

ここからは湘南高校について、関さんにお話しいただきたいと思います。

定期戦ことはじめ　湘南：小林忠生　1930 年生

22年の初夏、白い夏の制服がやけに印象に残っている当時紅顔の美少年、鈴木（トクエ）、原（ゲーゲー）、山形（オトキチ）の3君がはるばる藤沢の湘南中学まで定期戦の申し入れに来てくれた。他の種目は学習院と定期戦を組んでいるが、「サッカーは是非湘南と」とのことであり我々としても有難くお受けした。

戦後間もなくのことであり、まだまだ昔からの名門チーム（サッカーだけでなく今でいう進学校でもあった）が強く、例えば附属、五中（小石川高）、九中（北園高）、湘南、浦和中（県立浦和高）などが強豪と目されていた。附属はその前年に行われた全国中学選手権で関西の雄、神戸一中を決勝戦で1対0で破り優勝しており、願ってもない定期戦の申し入れであった。

第1回の定期戦は2対1で湘南が勝たせて貰ったが大変な熱戦であったことを記憶している。当時の附属のメンバーのうち慶応に進んだ鈴木、松沢、両角君達とは勿論のことながら、藤本君とは会社（東京海上）のチームで、村岡君とはユニバーシアード（ドルトムント）でそれぞれチームメートとして一緒に楽しくプレイをさせてもらったことが懐かしく思い出されます。

湘南と附属は勉学を重視するといった学校の校風や環境が似ていると思われるし、そのサッカーもショートパスを中心としてチームプレイを重視するカラーのチームであり、まさに恰好の好敵手だと思われます。

今後両チームが文武兼ね備えた高校生らしい選手たちによって好試合が続けられることを望んでやみません。

「附属中学　サッカーのあゆみ」　1984年5月発行　※60周年記念誌

附属・湘南　サッカー定期戦　（筑波大学附属高校 vs 神奈川県立湘南高校）

回 数	附属中心回	実施年		月 日	会 場		戦		績				
1	57	1947	昭和22年	7月23日	東大G		●	附属中	1	-	2	湘南中	○
2	58	1948	23 年	6 月 20 日	湘南G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
3	58	1949	24 年	5 月 21 日	附属G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
4	59	1950	25 年	7 月 8 日	湘南G		●	附属高	1	-	2	湘南高	○
5	60	1951	26 年	5 月 12 日	附属G		○	附属高	1	-	0	湘南高	●
6	61	1952	27 年	5 月 11 日	湘南G		○	附属高	2	-	0	湘南高	●
7	62	1953	28 年	5 月 9 日	附属G		○	附属高	3	-	0	湘南高	●
8	63	1954	29 年	4 月 29 日	湘南G		○	附属高	3	-	0	湘南高	●
9	64	1955	30 年	5 月 8 日	附属G		○	附属高	4	-	3	湘南高	●
10	65	1956	31 年	4 月 29 日	湘南G		○	附属高	3	-	0	湘南高	●
11	66	1957	32 年	4 月 29 日	附属G		○	附属高	3	-	0	湘南高	●
12	67	1958	33 年	4 月 29 日	湘南G		○	附属高	5	-	0	湘南高	●
13	68	1959	34 年	5 月 10 日	教育大G		○	附属高	4	-	0	湘南高	●
14	69	1960	35 年	?	湘南G		○	附属高	3	-	2	湘南高	●
15	70	1961	36 年	4 月 30 日	附属G		○	附属高	2	-	0	湘南高	●
16	71	1962	37 年	?	湘南G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
17	72	1963	38 年	4 月 28 日	附属G		○	附属高	2	-	0	湘南高	●
18	73	1964	39 年	?	湘南G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
19	74	1965	40 年	4 月 29 日	附属G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
20	75	1966	41 年	5 月 15 日	湘南G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
中止	76	1967	42 年	中　止　（関東大会予選により、日程調整不調のため）									
21	77	1968	43 年	4 月 7 日	附属G		○	附属高	1	-	0	湘南高	●

22	78	1969	44年	3月30日	湘南G		○	附属高	3	-	0	湘南高	●
23	79	1970	45年	?	附属G		○	附属高	2	-	0	湘南高	●
24	80	1971	46年	?	湘南G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
25	81	1972	47年	?	附属G		○	附属高	1	-	0	湘南高	●
26	82	1973	48年	4月1日	湘南G		○	附属高	1	-	0	湘南高	●
27	83	1974	49年	?	附属G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
28	84	1975	50年	?	湘南G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
29	85	1976	51年	?	附属G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
30	86	1977	52年	?	湘南G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
31	87	1978	53年	?	附属G		●	附属高	2	-	6	湘南高	○
32	88	1979	54年	4月1日	湘南G		●	附属高	0	-	3	湘南高	○
33	89	1980	55年	?	附属G		●	附属高	1	-	2	湘南高	○
34	90	1981	56年	?	湘南G		○	附属高	2	-	1	湘南高	●
35	91	1982	57年	4月4日	附属G		○	附属高	1	-	0	湘南高	●
36	92	1983	58年	4月3日	湘南G		●	附属高	0	-	7	湘南高	○
37	93	1984	59年	4月8日	附属G		●	附属高	1	-	2	湘南高	○
38	94	1985	60年	3月31日	湘南G		●	附属高	0	-	1	湘南高	○
39	95	1986	61年	4月6日	附属G		●	附属高	0	-	1	湘南高	○
40	96	1987	62年	4月5日	湘南G		●	附属高	0	-	6	湘南高	○
41	97	1988	63年	4月3日	附属G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
42	98	1989	平成元年	4月2日	湘南G		●	附属高	1	-	2	湘南高	○
43	99	1990	2年	4月1日	附属G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
44	100	1991	3年	3月31日	湘南G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
45	101	1992	4年	4月5日	附属G		●	附属高	1	-	4	湘南高	○
46	102	1993	5年	4月4日	附属G		●	附属高	0	-	3	湘南高	○
47	103	1994	6年	4月3日	附属G		△	附属高	3	-	3	湘南高	△
48	104	1995	7年	4月2日	附属G		●	附属高	0	-	5	湘南高	○
49	105	1996	8年	3月24日	湘南ｻﾌﾞG		○	附属高	1	-	0	湘南高	●
50	106	1997	9年	3月23日	附属G		●	附属高	0	-	4	湘南高	○
51	107	1998	10年	3月22日	湘南G		●	附属高	2	-	4	湘南高	○
52	108	1999	11年	3月21日	附属G		●	附属高	0	-	4	湘南高	○
53	109	2000	12年	3月20日	湘南G		●	附属高	0	-	6	湘南高	○
54	110	2001	13年	3月18日	附属G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
55	111	2002	14年	3月17日	湘南G		●	附属高	0	-	3	湘南高	○
56	112	2003	15年	3月16日	附属G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
57	113	2004	16年	3月14日	湘南G		●	附属高	0	-	1	湘南高	○
58	114	2005	17年	3月13日	附属G		●	附属高	0	-	2	湘南高	○
59	115	2006	18年	3月19日	湘南G		●	附属高	1	-	6	湘南高	○
60	116	2007	19年	3月18日	附属G		○	附属高	2	-	0	湘南高	●
61	117	2008	20年	3月16日	湘南G		●	附属高	0	-	3	湘南高	○
62	118	2009	21年	3月20日	附属G		●	附属高	0	-	1	湘南高	○
63	119	2010	22年	3月20日	湘南G		●	附属高	0	-	5	湘南高	○
中止	120	2011	23年	3月20日	中　止　(東日本大震災のため)								
64	121	2012	24年	3月20日	附属G		●	附属高	0	-	5	湘南高	○
65	122	2013	25年	3月20日	湘南G		●	附属高	1	-	4	湘南高	○
66	123	2014	26年	3月16日	附属G		△	附属高	1	-	1	湘南高	△
67	124	2015	27年	3月21日	湘南G		●	附属高	1	-	10	湘南高	○
68	125	2016	28年	3月20日	附属G		△	附属高	0	-	0	湘南高	△
69	126	2017	29年	3月20日	湘南G		●	附属高	1	-	3	湘南高	○
70	127	2018	30年	3月18日	附属G		●	附属高	1	-	4	湘南高	○
71	128	2019	31年/令和元	3月21日	湘南G		●	附属高	0	-	1	湘南高	○
中止	129	2020	令和2	3月15日	中　止　(新型コロナウイルスのため)								
交流会	130	2021	令和3	3月21日	交流会のみ開催　(新型コロナウイルスのため)								
交流会	131	2022	令和4	3月21日	交流会のみ開催　(新型コロナウイルスのため)								
72	132	2023	令和5	3月11日	湘南G		●	附属高	0	-	7	湘南高	○
附属　21勝37敗14引き分け													
2023(令和5)年度　附属・湘南サッカー定期戦					9：30～			開会式					
＜会　場＞　筑波大学附属高校					10：00～11：30			現役戦(40分ハーフ)					
＜期　日＞　2024年3月20日					11：30～12：30			OB戦(高校生含む)					

プレゼン② 神奈川県立湘南高校の 100 年　（関佳史）

1）自己紹介

私は湘南高校サッカー部 OB 会事務局長をしています。職業はテレビ神奈川の関連会社で、いま顧問をしています。また横浜市市民文化会館関内ホールの館長をしており、今年の 7 月に神奈川県サッカー協会会長に選任されました。高校選手権をテレビ神奈川でずっと一緒にやらせていただいた関係でお声が掛かり、理事を 7 年ほどさせていただいたことから今回の人事となりました。

一昨年になりますが、2021 年、湘南高校 100 周年の折に、テレビ番組等を企画制作しました。興味のある方はホームページで公開しております。配付資料に URL がありますので、そちらでご覧いただければと思います。

『**湘南高校百年史**』　※湘南高校サッカー部 HP で公開

http://www.shonan-soccer.com/hyakunensi.pdf

『**湘南高校百年　文武両道の核心～初代校長赤木愛太郎の理想～**』※ 30 分の番組を tvk にて放送　HP で公開

http://www.tvk-kaihouku.jp/openyokohama/shounan-hc.php

2）神奈川県立湘南高校の紹介

湘南高校をざっと紹介させていただきます。県内トップクラスの進学校ですが、かなりクレイジーな体育祭をやっています。観客は 5,000 人くらい来るという実績もあります。勉強・部活・行事。体育祭やクラス対抗のスポーツ大会という行事を非常に重視しており、文武両道の校風が定着しております。

神奈川県では全県一学区であり、ざっくり言うと、勉強するなら横浜翠嵐。東大の入学者数などは翠嵐が一番です。そして青春するなら湘南。「三兎を追う」という言い方をしています。三兎とは、勉強と部活と、体育祭を中心とした行事です。

写真のような衣装を作って音楽を選んでダンスをし、バックボードと言うのでしょうか、いろんな作りものをしています。1 年がかりで計画し、夏休みや 9 月はこの制作に没頭している次第です。

サッカー部ですが、まずは創部から昭和の時代を経て、のちに全国レベルの実績を積んできました。関東大会、高校選手権、国体は、スライドにあるような戦績になっています。国体については先ほど中塚先生にご紹介いただいたように、第 1 回で優勝しています。日本一になったことがあるということです。選手権には昭和 12 年に初出場。直近での出場は昭和 63 年なので、およそ 50 年ぶりに選手権に出られたことになります。昭和 63 年度、64 年 1 月の高校選手権では全国ベスト 16 になりましたが、それ以降は出場できていません。

2004 年からスペイン遠征を隔年で実施してい

ます。アスレチックビルバオと、提携に近い形をとっており、試合をさせていただいています。コロナ禍でしばらく中断していましたが、2023年3月にようやく再開しました。

Jリーグ移行後は神奈川代表にはなっていませんが、直近で言いますと2年前の2021年、高校選手権神奈川県予選でベスト8に入り、公立校では厚木北や座間の次ぐらいにつけています。神奈川県ベスト30による選手権2次予選にまずは進出しようという目標を掲げて活動しています。

ざっくりした湘南高校の紹介でしたが、テレビ神奈川で30分番組をつくった映像があるので見ていただき、学校のイメージを掴んでいただけたらと思います。

実を申しますと、初代校長の赤木愛太郎先生の講談を作ったOBがおられます。45分ほどの講談です。「初代校長赤木愛太郎の理想」というもので、劇的な、いろんな流れがあってなかなか面白いと思いました。講談になる人はなかなか少ないと思います。

では動画を見ていただきます。

▶映像

藤沢市にある神奈川県立湘南高等学校。2021年には創立100周年を迎えました。県内ではトップクラスの進学校として知られています。卒業生たちの進路はノーベル化学賞に始まり、政界、財界、音楽や芸術、そして、オリンピアンやプロ野球選手など非常にバラエティに富み、まさに文武両道です。生徒に話を聞いてみましょう。

「湘南生は三兎を追うというので、勉強も部活も行事も大変なんですけど、それをやってるから周りよりもっと頑張ろうとプラスに思えて」「部活動加入率が200%を超えていて、兼部がすごく盛んな学校なんで、僕自身もハンド部に入ってますが音楽研究部にも入っていて。生徒たちは校風である文武両道の実現に日々励んでいます」

この文武両道の伝統は一体どのようにして生まれたのでしょうか。その根底は、創立当初に遡ります。1921年、旧制中学として誕生した湘南高校。初代校長に就任したのが、当時48歳の赤木愛太郎です。すでに他校にて、校長としての指導が高く評価された赤木は、神奈川県からの強い要請を受け、藤沢の地に降り立ちます。そして掲げた目標は「日本一の学校を作る」。その宣言通り、湘南高校にもたらした二つの日本一は、学校に息づく文武両道の基礎となったのです。

湘南高校が一世紀に渡り育ててきた伝統、文武両道。卒業生たちが、文武両道の「武」の象徴と口を揃えた出来事があります。野球部の全国制覇。夏の甲子園大会の決勝です。そして、もう一つ。この偉業の影に隠れがちなのはサッカー部の全国制覇です。湘南の「武」の礎となった2つの全国制覇。それぞれの道のりには大きな違いがありました。

1921年、サッカー部は湘南中学の創立と同時に誕生。一方で野球部の創設はそこから遅れること25年。学校創立当初、赤木校長が野球部の設立を禁じたといいます。一体なぜだったのでしょうか。

3）初代校長　赤木愛太郎

番組ではこのあと、中塚先生が野球害毒論の話をしてくださいますが、少し戻って初代校長・赤木愛太郎先生、東京高師の卒業生ですが、そこからの流れを簡単に振り返ります。

赤木校長は明治6年に生まれ、明治33年に東京高師を卒業、大正10年に新潟からヘッドハントして神奈川県の湘南中学校長に就任します。そこから27年間、戦争が終わる昭和23年まで、湘南中学の校長を務められました。

湘南中は神奈川で６番目の公立中学で、オレンジ色に塗ってあるところが明治の初めにできた県立１中から４中です。少し遅れて横浜二中、いまの横浜翠嵐と湘南が設立されます。

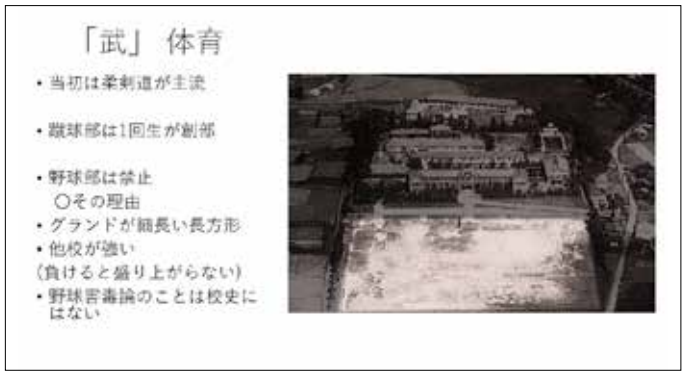
地域でいうと横浜が都会、小田原は城下町、横須賀は海軍があったところで、湘南は呑気な風土のところでした。江ノ島があって、赤木校長の最初の文章によると、物見遊山と観光地といった捉え方をされており、神奈川の中では都会ではない場所だったと思います。丘の上に校舎があり、グラウンドを下に作りました。

赤木校長の教育目標としましては、日本一の学校を作ることを掲げております。藤沢の片田舎で高い目標を掲げていますが、具体的に何かの日本一になるのとはまた異なります。

もう一つ掲げたのが、智徳体の全人教育ということで、こちらは明治初頭から日本の教育で言われてきたことです。文武両道という言葉は当時は出てきておらず、後で出てくるようになります。

「文」についてもいろいろありますが省略します。

「武」のところでは、当初は柔剣道が主流ということだったと 10 周年史に書かれています。横須賀の海軍の幹部の子弟を預かるということが大きな使命だったようです。



４）蹴球部の始まりと後藤基胤先生

蹴球部は１回生が創部しましたが、専門指導者はいません。野球部は明確に禁止になっています。理由としては、グラウンドが細長い長方形だったこと。写真にあるとおり、校舎に沿って長辺 150m ぐらい、当時はあったようですが、短辺は 70m ぐらいということで、野球には適さないということが理由とされていました。

開校の年、大正 10 年の極東選手権の日本代表の写真です。左下に写っている後藤基胤先生が、開校３年目の湘南中学に数学教師として赴任します。赤木校長が引っ張ったのでしょう。大正 10 年の極東選手権での後藤選手の得点が、日本代表が海外で挙げた最初の得点であると記録されています。コマネズミのように走り回り、非常に速い動作、「ポケット猿」、略して「ボケざる先生」と呼ばれていたと記録されています。

後藤先生は１年４ヶ月、湘南で指導され、その後学習院へ転勤されます。後藤先生に教わった２回

生の岩渕二郎先輩が、その後 50 数年間にわたって湘南高校のサッカー部の面倒をみてくださり、強化しました。

ところで横浜二中、いまの横浜翠嵐の方が数年早くサッカー部を立ち上げています。滝沢先生という東京高師出身の校長先生で、志田中、のちの藤枝東と同じぐらいの決意でサッカーに取り組み始めたようです。ですので、私たちの当時の目標は「目指せ横浜二中」でした。

5）開校 10 周年のころ

開校 10 周年のころ、赤木校長はグラウンドを拡張します。野球ができる形になりましたが、ここでも野球部はできていません。校歌の制定、ご覧のような手作りのプール、グラウンドの拡張などに取り組まれます。開校 10 周年前後の大きな動きとなっています。

戦前も英語の教育を継続し、リベラルな印象があります。赤木校長は、必要なことは誰が何と言おうとやるんだという考えの持ち主だと思います。サッカーが校技というのは 10 周年史でも書かれておりません。

6）戦前の黄金時代

新聞記事は昭和 12 年のものですが、この頃になるとサッカーが強くなってきて、全校生徒 800 名が全員サッカー選手というすごい記事が書かれています。このあたりが、サッカーが校技と言われる最初の記事となります。

昭和 12 年頃から全国優勝する昭和 21 年頃にかけてが、強豪校として全国に名を馳せた時期となります。まず昭和 5 年に神奈川県の大会で初優勝。昭和 12 年に選手権に初出場。14 年にベスト 4。昭和 15 年は朝鮮半島のチームに 1 回戦で 8-0 でボロ負けしますが、関東大会では優勝。昭和 16 年にも関東大会で連覇。このころの OB からは、日本代表選手も出ています。

神戸一中が非常に強い時代で、湘南では「目指せ、神戸一中」が合言葉になっていました。

先ほど触れました岩渕二郎先生は、後に湘南の教員になるんですが、写真のボールを置いてあるところが岩渕先生です。

こんな流れで湘南の蹴球部は、赤木愛太郎校長のもとで実績を積み重ねたということになります。

7）戦後の流れ

昭和 21 年 9 月、終戦の 1 年後に、赤木校長は野球部の創設を認めます。昭和 21 年 11 月に蹴球部が第 1 回国体で優勝。先ほど中塚先生が紹介されたところです。

昭和 23 年 1 月に赤木校長は退任されます。これは公職追放の流れの中で危険を察知されたのと、すでに 70 歳を超えておられましたので潮時かなというところもあったと推察されますが、はっきりしたことはわかっておりません。昭和 24 年 8 月、マッカーサーの来日後ですが、野球部が甲子園で優勝しました。上の写真は野球部が創立されたころ、昭和 21 年 9 月ぐらいです。下の写真はちょっと見にくいですが、昭和 22 年の正月に、国体優勝メンバーで撮った写真です。

蹴球部のことになりますが、昭和 21 年の第 1 回国体で優勝しましたが、記録がほとんど残っていません。新聞も、戦争終わってすぐのことで、1 センチ角か 2 センチ角ぐらいの小さな記事が残っているだけです。国体で多くの種目があったので、記事になりにくかったのかもしれません。写真が数枚残っている程度です。決勝では、目標であった神戸一中に 3 対 2 で勝って全国制覇したということで、赤木校長はものすごく喜ばれ、ご覧のような漢詩を作られました。

赤木校長時代については申し上げたような流れがあり、これが東京高師から受け継いだものと言えると思います。

8）近年の動向

その後についてです。筑波大附属高校との定期戦が昭和 22 年から始まり、現在に続きます。これも先ほど中塚先生がご紹介していただいたものです。

戦後、東京高師の流れは東京教育大学に受け継がれますが、東京教育大学の影響は大きいものがありました。鈴木中（ただし）先生が昭和 39 年に赴任され、なんと 28 年間にわたってサッカー部をみてくださいました。この時代だけで高校選手権に 3 回出場、関東大会優勝 1 回を数えます。

昭和 63 年には教え子の藤塚久雄先生とのコンビで選手権出場。全国ベスト 16 という、できそうでなかなかできない画期的な活躍をされています。鈴木先生は神奈川県サッカー協会の会長にも就任され、神奈川県全体のサッカーの発展に尽くされました。

今日は藤塚先生が来ておられます。せっかくですので湘南高校の様子などを少しお話しください。

藤塚：ご紹介にあずかりました藤塚です。こんな高いところに出させていただきちょっと恥ずかしい思いをしております。湘南高校の様子についてということですが、こちらのスライドのおじいさん先生が鈴木中先生です。その後ろにいるのが私で、鈴木先生の右隣にいる方が山田さんとおっしゃって、この方も教育大学のサッカー部でした。湘南サッカーの観戦をしている場面です。

湘南と附属のつながりですが、私は 1984 年に

湘南高校の教員に採用していただいたわけですが、1987 年に中塚先生が附属に赴任され、それ以来毎年、定期戦で行ったり来たりしながら再会するという機会でした。

また、これまでの話の中で YC&AC、横浜カントリーアンドアスレティッククラブという外人クラブと高等師範のゲームの話がありましたが、その試合は現在も続いておりまして、来年で 120 周年を迎えます。神奈川の茗友クラブ、筑波大蹴球部同窓会が大学の方から運営を任されており、毎回参加しています。やはり東京高師、東京教育大の先輩方のご支援をいただきながら、歴史と伝統をかみしめながら、交流を続けさせてもらっているということです。

関　：藤塚くん、突然振ってすみません。ありがとうございます。

というような湘南高校の流れでして、東京高師、東京教育大学の皆様のお世話になって、サッカー部は継続しているというような状況です。

9）野球部の話

少し野球の話に戻ります。野球は、先ほどご紹介しましたように戦後野球部が認められて、グラウンドは戦前に拡張しましたので、野球が十分できる状況になっていました。

記録によりますと、戦争でスタートラインが一緒になったから野球をやっていいよということになり、昭和 21 年に許可が下りたようです。背景として、実は鎌倉って空襲を受けてないんです。横浜から平塚・小田原は大きな被害を受けるのですが、他地区に比べれば少し余裕があったようです。昭和 24 年ぐらいになると、厚木の米軍基地で米軍と練習試合をやってボールをもらってきたということを、私の作った番組で佐々木信也さんがおっしゃっていました。

そんな状況で、野球部の方は昭和 24 年 8 月に甲子園で優勝します。「無欲の勝利」と言われています。創部 4 年目の快挙で、33 年ぶりに箱根の山を越えた優勝旗ということで、藤沢駅前の写真がございます。大変な盛り上がりだったそうです。

このときの選手に、後にプロ野球ニュースのキャスターとなる佐々木信也さんがおられます。佐々木さんのお父様が慶応大学の野球部出身で、湘南の野球部を指導されていました。キャッチャーフライを真上にノックするのがすごくうまく、野球の技術はすごく高いお父様と言われています。

野球の話まで来ましたので、ここで私の話を終わらせていただきます。

中塚：どうもありがとうございました。戦前の湘南中学から新制の湘南高校までたどり着きました。ちなみに湘南にサッカーの技術を紹介した後藤基胤さんは東京高師卒業生ですが、出身中学は東京高師附属中です。29 回卒業生ですから、蹴球部創部の話で出てきた井染さんらと同期生ですね。

ではここで 10 分間休憩を取りたいと思います。

－ 10 分間休憩－

中塚：ここから後半戦となります。石坂さんにお話いただき、その後は全体で質疑応答、ディスカッションに移りたいと思います。では石坂さん、よろしくお願いします。

プレゼン③　「野球害毒論争」とサッカー（石坂友司）

1）自己紹介

奈良女子大学の石坂です。どうぞよろしくお願いします。

私がなぜここに呼ばれたのか。冒頭でお話した通り、いまはオリンピックの遺産を中心に研究しています。今日の朝日新聞「耕論」に、札幌オリンピックに関するコメントが掲載されました。ご覧いただければ幸いです。このようなことに取り組み 20 年近くになりますが、そもそも私の研究の関心は、明治時代にヨーロッパやアメリカからスポーツが入ったときに、どのような形で日本が受け入れ、日本のスポーツを形作ってきたのかということで、オリンピックを軸にしながら考えていました。20 年前の博士論文でこのことを取り上げ、そのときに「野球害毒論争」がかなり大きなインパクトを日本社会に与えたのではないかという観点で研究をしておりました。今日はその話を用いながら、中塚先生や関さんの話を繋げる役目を期待されているかと思います。

2）野球害毒論争とは

野球害毒論争についてはご存知の方も多いかと思います。1911 年に東京朝日新聞紙上で展開された論争です。これは前後の文脈がいろいろあります。まずは 1911 年 8 月 29 日から 9 月 19 日に「野球と其の害毒」という連載がありました。害毒ということは、いまでいう弊害という意味です。害毒とする側の意見が紹介される連載があり、その他の新聞で擁護論が展開されます。この応酬が野球害毒論争と言われるものです。

東京朝日新聞の連載の冒頭を飾ったのは新渡戸稲造です。当時は教養主義の一番の論客で、旗頭。そういう知識人の新渡戸が、野球に害毒があるということを強く示されたことで波紋を呼びました。

その後は、次ページの表のように学校長や政府関係者などが続々と登場します。野球人だけでなく、こうした方々が出てくることで議論に権威が付与されました。

連載記事の前にいくつかの布石がありました。まず 1910 年 11 月に、「野球の興行化」に対する批判がありました。連載ではない単独の記事だったのですが、まずこういうことが示されます。

その後、1911 年 8 月 20 日から 24 日までに「野球の諸問題」という連載があり、入場料の問題、興行化にともなう問題などが取り上げられています。早稲田・

野球害毒論争（1911 年）

- ➢東京朝日新聞
- ●1911年（明治44）年8月29日～9月19日「野球と其の害毒」
- ●野球は「害毒」とする識者談話の紹介による連載／他紙による野球擁護派の応酬
- ●有識者　新渡戸稲造らの登場
- ●校長、政府関係者など、著名な人物や要路にある人たちによる野球批判＝議論に権威が付加（鈴村 2009）

東京朝日新聞の連載記事

- ➢1910（明治43）年11月25日 「野球の興行化」に対する野球批判、連載をとらない記事
- ➢1911（明治44）年8月20日～24日「野球の諸問題」
  - ◦「入場料と野球渡米」「極端なる学校広告」「興行化と虚栄心」「洋行か国外興行か」
  - ◦早稲田・慶応学生の華美な服装と精神的堕落（鈴村 2009）
- ➢**8月29日～9月19日「野球と其の害毒」＝野球害毒論争**

「近年野球の流行盛なるに従ひて弊風百出し青年子弟を誤ること多きをもって本紙はしばしばその真相を記して父兄の参考に供するところありたり。」

新渡戸（稲造）一高校長談

▷野球は賤技なり剛勇の気無し

▷日本選手は運動の作法に暗し

▷本場の米国すでに弊害を嘆す

▷父兄の野球を厭（いと）へる実例

「私も日本の野球史以前には自分で球を縫ったり打棒（バット）を作ったりして野球をやったこともあった。野球という遊戯は悪くいえば

▶巾着切の遊戯　対手を常にペテンに掛けよう、・・・」

慶応の学生の華美な服装と精神的堕落として書かれているものもあります。

一般的に「野球害毒論争」と言われるのは「野球の諸問題」とそれに続く「野球と其の害毒」をあわせた連載記事と、野球を擁護する立場の記事をあわせた論争です。

新渡戸稲造が言ったことについてはご存知の方が多いと思いますが、記者がまとめたのは「野球は賤技なり。剛勇の気無し」「日本選手は運動の作法に暗し」「本場の米国既に弊害を嘆す」などです。また、「私も日本の野球史以前に、自分で球を縫ったり、バットを作ったりして野球をやったこともあった。野球という遊戯は、悪く言えば巾着切りの遊戯である」と言っています。相手を常にペテンに掛けようとする。巾着切りというのはスリのことですね。盗塁など、相手の油断をみて次の塁を狙っていくのが野球の中にみられるということが、連載の冒頭で語られるわけです。

これらの言葉をすべて新渡戸稲造が言ったのかについては、実は定かではありません。記者の聞き取りが活字になったもので、新渡戸はその後アメリカに行ってしまうので真実はわからないままになっています。

今日は詳しくは話しませんが、野球関係者による擁護する意見もありました。

1911年9月1日から24日まで、東京日日新聞では「学生と野球」と題して、主に擁護論の立場の方から反論記事が出てきます。そして大演説会が開かれます。天狗倶楽部による演説会などが続々と開かれ、大きな論争になっていくことになります。

野球関係者の擁護論

- 1911（明治44）年9月1日～24日
  東京日日新聞　「学生と野球」
- 9月17日　読売新聞社主催「野球問題大演説会」
- ９月23日　天狗倶楽部「野球事件演説会」

野球害毒論争「野球と其の害毒」掲載一覧（1911年8月29日～9月19日）

掲載回	論者	役職	備考
1	新渡戸稲造	一高校長	
2	川田正澂	東京府立第一中学校長	
3	福原鐐二郎	文部省専門学務局長	
3	田所美治	文部省普通学務局長	
4	中村安太郎	静岡中学校長	
5	広田金吾	攻玉社講師	
5	早稲田大学講師某氏	早稲田大学講師	
6	米国人某氏		
7	永井道明	東京高等師範教授	
8	河野安通志	早稲田大学講師	
9	松見文平	順天中学校長	
9	寺尾熊三	山梨県都留中学校長	書翰摘談
9	某中学校教員	中学校教員	
10	加納久宜	日本体育会長	
10	米国人某氏		
11	田中道光	曹洞宗第一中学校長	
11	角谷源之助	静岡師範学校長	書翰
12	菊池謙二郎	水戸中学校長事務取扱	
13	中野	早稲田中学幹事、文学士	
13	河野安通志	早稲田大学講師	
14	デービッド・ジョルダン	スタンフォード大学総長	
14	金子魁一	東大医科整形外科医局長	
15	磯部検三	日本医学校幹事	
15	古瀬安俊	文部省学校衛生係嘱託医学士	
16	榊保三郎	九州帝国医科大学博士	
17	玉利喜造	鹿児島高等農林学校長	
17	大里猪熊	大阪府立富田林中学校長	
17	服部念一	四條畷中学校長	
18	乃木希典	学習院長	
18	服部他助	学習院野球部長	
19	佐久間秀雄	文部大臣秘書官	
19	三好愛吉	第二高等学校長	
20	池原康造	新潟医学専門学校長	
21	江口俊博	広島県立忠海中学校長	
22	全国中学の調査		

3）先行研究にみる野球害毒論争の評価

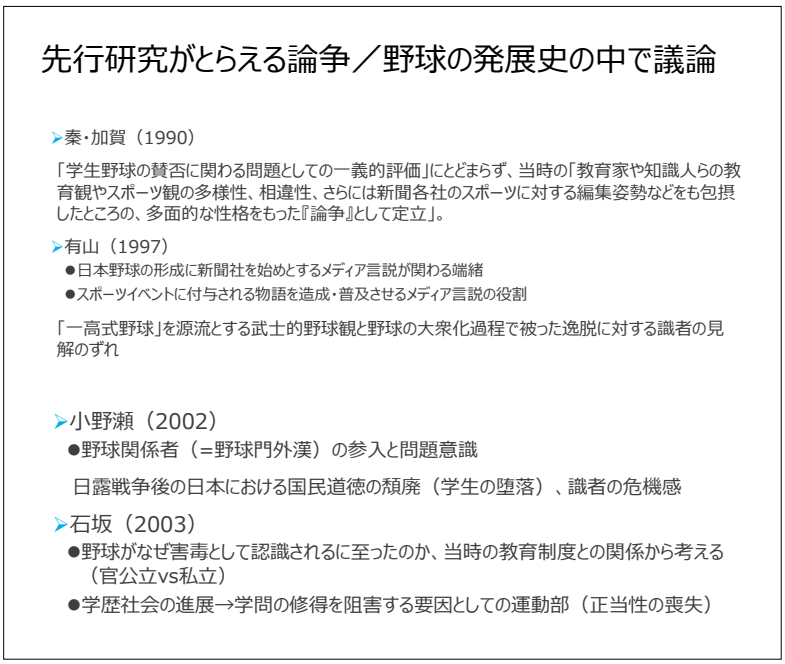
野球害毒論争についての先行研究はけっこうあります。主なものをみていくと、例えば秦真人さんと加賀秀雄さんの研究では「学生野球の賛否に関わる問題としての一義的評価」にとどまらず、当時の「教育家や知識人らの教育観やスポーツ観の多様性、相違性、さらには新聞各社のスポーツに対する編集姿勢などをも包摂したところの、多面的な性格をもった『論争』として定立」したものと評価されています。

有山輝雄さんは、「日本野球の形成に新聞社を始めとするメディア言説が関わる端緒」となり、「スポーツイベン

トに付与される物語を造成・普及させるメディア言説の役割」が非常に大きくなるきっかけになったと書かれています。

このころは早稲田や慶應が覇権を握る時代で、その少し前は一高が非常に強かった時代です。「一高式野球」を源流とする武士的野球観が、野球の大衆化過程で少しずつ変化し、そこで生じたずれがこのような論争を生じさせたという分析もあります。

小野瀬剛志さんは、野球門外漢、すなわち野球は詳しくないが教育の領域から関わる方や、日本社会を論じる評論家たちが参入してきたことを指摘しています。ちょうど日露戦争後、国民道徳の崩壊や退廃、学生の堕落について識者が危機感を抱いていた時代です。こうした危機感が、この論争の背景にあったのではないかという研究です。



私が 2003 年の論文の中で書いたのは、まず野球害毒論争がなぜ教育問題として当時の教育者に捉えられたのかということです。一高から早稲田・慶應へ覇権が移る時代です。いまでこそ早稲田・慶應は一流大学ですが、当時は専門学校から大学に昇格したばかりです。それまでは一高や帝国大学といったエリート層だけがスポーツに触れ、スポーツの価値を高めようとしていました。そこに早稲田・慶應が参入してスポーツを娯楽化したり興行化したりしていくことに対する批判があったのではないか。そんな観点で論文をまとめました。

4）野球害毒論争の影響

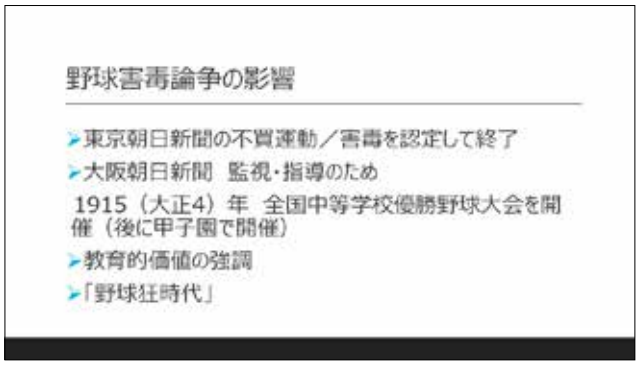
一般的な野球害毒論争の影響として、右下スライドのようなことが言われています。

東京朝日新聞紙上で展開されましたが、系列の大阪朝日新聞が 1915 年に、いまの甲子園野球、全国中等学校優勝野球大会を開催します。東京朝日新聞は当時人気のあった野球を「害である」と攻撃したわけですから、かなり批判もあり、不買運動も起こったので害毒の存在を認定して論争を終了することになりました。

大阪朝日新聞社は、弊害があるものを監視・指導するために全国中等学校優勝野球大会を開催したと述べています。教育的価値を強調し、ひたすらそれを高めようとするいまの高校野球に繋がります。

野球が害毒と批判されたにもかかわらず、野球は非常に人気が出て「野球狂時代」と言われる 1930 年代が到来します。これが一般的に言われる野球害毒論争の影響です。

私も 2003 年当時は野球のことしか考えておらず、あるいは教育のことを考えるに留まっていたのですが、今回いただいた機会に改めて他の競技への影響を考えてみました。先ほど関さんが流してくださった湘南高校 100 周年の映像の中で中塚先生が解説されているように、湘南高校が野球部をつくらなかった背景に、野球害毒論争があるのではないかということです。刺激的な仮説をいただいたので、それをちょっと考えてみたいというのが今日のテーマです。

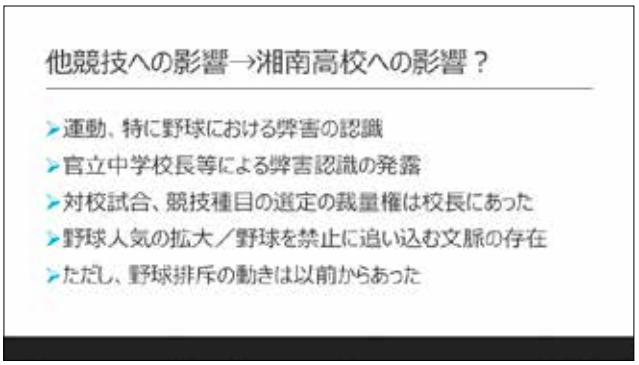


大きく見ますと、運動、特に野球における弊害は、当時はかなり認識されていたと言えるでしょう。論争に登場した官立中学校の校長等が弊害を認識していたことも

事実です。

それから当時のスポーツは、対校試合をしたり競技種目を選定したりするときに学校長の権限が非常に強く、裁量権を校長が持っていました。校長が野球の弊害を認識していた場合、野球に対する締め付けが強化されることが考えられます。野球人気が拡大する一方で、野球を禁止に追い込む文脈があったということです。

しかし野球排斥の動きは害毒論争の以前からありました。このあたりを、日本に近代スポーツがもたらされたころにさかのぼってみていきたいと思います。



5）日本への西洋スポーツの伝播

西洋スポーツの日本への伝播という意味で一番早かったのは陸上競技やボート競技でした。イギリスのエリート校で行われていた、スポーツを通じて知・徳・体を鍛える、先ほど話がありました全人教育のようなものが、日本のエリート校の学生たちに受け入れられたと言えるでしょう。

それから当時は、近代スポーツをするということ自体が西洋文化の表出になっていたと見られています。そのことは学生によってボート競技や陸上競技が積極的に行われることにつながります。

私の研究はここから始まります。日本で最初の対校試合が行われたのが、東京高師と一高のボート対校戦で 1883 年のことです。東京高師、いまの筑波大学の漕艇部ですね。自己紹介し忘れましたが、私は筑波大学漕艇部の OB です。

ボート競技は圧倒的人気がありました。大日本体育協会の初代会長・嘉納治五郎の後を継ぐ第 2 代会長・岸清一もボート部出身です。岸などボート競技に関わった人たちが後に 1940 年のオリンピック、いわゆる「幻の東京オリンピック」を招致しました。

6）野球人気の拡大

ボート人気から 10 年、20 年を経て、野球人気が拡大します。ホーレス・ウィルソンが野球を一高の学生たちに教え、一高と横浜アマチュアクラブとの試合が実現します。1896 年のことです。

このころから、ボートから野球へと人気が移ったとみられています。理由は簡単で、ボートはできるところが限られています。また、艇がないとできません。競技的にも楽しくないと思われています。実際にはボートは結構面白いのですが、多くの人がやれるものではありません。そういう意味で野球に覇権を取られていくようになります。

「一高時代」と呼ばれる時代が 1890 年から始まり、早慶に敗れる 1904 年まで続きます。一高では、校風というものを、運動部の学生たちが表していたとされ、学校で部活をすることは誇らしいこととみられていました。そこに少しずつ新渡戸稲造の影響を受けた教養主義のようなものが入ってきて、運動部だけがなぜ校風を表すのだ、身体活動でしかないではないかということで、「非運動家」との対立が起き始めます。野球害毒論争がはじまる少し

前のことです。1904 年に一高が早慶に相次いで敗れ、一高の野球界での覇権が崩れます。覇権を握ることで、校風を表す運動部の存在意義が認められていたのですが、早慶に立て続けに敗れることで学校内での特権的地位も変化してきます。一般的にはここから、一高から早慶の時代へ変わったと言われています。

この時代の特徴として、ボート競技の対校戦は非常に盛り上がりを見せていました。応援合戦は過熱化し、レースの中止が相次ぐことになります。野球よりも早く、ボートが対校戦の中止を迫られていきます。例えば、いまでもやっている東商戦、東大と一橋大学の対校レースです。この第 1 回対校戦には高等師範も入って三つ巴でやりました。高等師範はすぐに離れますが、一高と高商の 2 校の対戦は続きます。それが 1890 年には危険回避が理由で中止となります。

野球でも同じように、ボートに続いて対校戦の中止につながる様々な事件が起こりました。有名なインブリー事件は 1890 年。一高応援団が外国人に重傷を負わせるという事件です。野球が一高の「校技」と言われた時代には様々なトラブルが起こります。例えば 1904 年の一高対慶応戦の中止。判定を巡る問題がきっかけで、両者譲らず、試合が中止になってしまいました。1906 年には早慶戦が中止になり、しばらく早慶戦はできなくなりました。

野球人気の拡大

- ボート競技→野球競技
- ホーレス・ウィルソン
  - ●1872年（明治5）年　野球を教える
  - ●1896年（明治29）年　○一高vs横浜アマチュアクラブ
- 「一高時代」1890年－1904年
  - ●一高式野球観、武士道的野球観（日露戦争以降）
  - ●運動家＝校風／非運動家の分裂と対立（坂上 2001）
  - ●教養主義の台頭（新渡戸稲造）
- 1904　一高vs○早慶　一高の野球界での覇権が崩れる
  - ●運動部の校内での特権的位置の変化
  - ●一高野球→早慶の時代へ

過熱する対校戦

- ボート・圧倒的人気
  - ●一高　校風の振起、応援合戦の過熱→レースの中止も
- 一高・高商戦（1887（明治20）年～）
  - ●1890（明治23）年に中断＝危険回避が理由
  - ●同年　インブリー事件（野球）
  - ●中馬庚　一高の「校技」（坂上 2001）
- 1904（明治37）年　一高対慶応戦中止（判定をめぐる）
- 1906（明治39）年　野球早慶戦の中止／庭球・柔道・ボート
- ●学習院野球部　乃木希典
  - ●安部磯雄（早稲田）　1908（明治41）年「運動世界」誌上で異議
  - ●「乃木学習院長に呈す」（創刊号）／乃木「運動会の神髄は士気の振作にあり」
- 1909（明治42）年　一高対三高戦紛争事件（判定）

7）野球害毒論争の背景

ちょうど野球害毒論争が起きる 3 年前、「運動世界」という雑誌の創刊号で、早稲田の野球部長・安部磯雄は、対校戦を禁じているという理由で学習院の乃木希典院長に異議申し立てをします。

それに対して乃木は「運動会の神髄は士気の振作にあり」とし、私はそれを禁止しているわけじゃないと反論します。その後禁止をしているんですけれども、害毒論争の火種が少しずつ見られるようになってきました。

このやりとりがなぜ野球害毒論争にたどり着いたのかというと、早稲田・慶応が力をつけはじめ、アメリカとの関係を強めていったことがあります。安部磯雄の影響が強いのですが、早稲田大学のアメリカ遠征が 1905 年。慶應義塾も 1908 年にハワイへ遠征します。早稲田の第 2 回米国遠征は 1911 年で、慶応も続きます。こうした形で、野球界での私学への覇権移動が起きてくる中、早稲田はスポーツの興行化に力を入れるようになります。これが野球害毒論争の一つの火種になったと見られます。

興行化するスポーツ（野球）

運動術士『運動界之裏面』（1906、中興館）

- 1905年（明治38）年　早稲田大学第1回米国遠征
- 1908年（明治41）年　慶応大学ハワイ遠征
- 1910年（明治43）年　早稲田大学ハワイ遠征
- 1911年（明治44）年　早稲田大学第2回米国遠征
  慶応大学第1回米国遠征

※私学への覇権委譲・興行化　野球害毒論争が引き起こされる背景の一つ

野球にもたらされる弊害を学校長たちは

徐々に認識するようになります。その先駆けとも言える一高の沢柳政太郎校長は、在任期間は短かったのですが、彼は「本校の品位を失墜せしむる」として 1898 年に対校戦を禁止します。これ以後も学校側から様々な抑圧が加えられるようになりました。校長の裁量ですので、学生は逆らうことはできません。このような状況がしばらく続きます。

有名なのが、1907 年の全国中等学校校長会議に出された諮問「各学校に行はるる競技運動の利害及び其の弊害を防止する方法如何」です。これは、教育者が教育問題として競技運動の弊害を考え始めたことを示しています。

そこで答申されたものは、競技運動の弊害として、競技に熱中して学業を阻害する、金銭を費やす、疾病障害を受ける、あるいは勝敗に重きを置きすぎて「紛擾の基となる」ということが書かれています。それを防止するために、学校長の許可を得ること、学力操行ともに中等以上の生徒でなければ対外試合に臨めないこと、応援者の取り締まりをすること、普段から運動時間を制限することが挙げられています。冒頭の中塚先生の話にありましたけど、まさにいま、部活動の地域移行が叫ばれている状況ですが、部活動めぐる問題はこのころから認識されていたということがわかります。

当時の様子を、野球界においてイデオローグと言われた飛田穂州は、「野球に直接関係あるもののほか全部といっていいくらい、総てのものが野球の反対者であり、排斥者であった。学校も家庭も挙（こぞ）って忌み嫌った。当時の選手というものは、教育者からまるで不良少年の如き扱いを受けていた」と述べています。野球害毒論争に繋がる背景がこの言葉からわかると思います。

野球害毒論争へとつながる弊害の認知

- 一高　沢柳政太郎校長（1898年7月20日 - 11月24日）（向陵史 1984）
- 「本校の品位を失墜せしむる」として対校戦を禁止

学校からの抑圧（校長の裁量）

- 1907年　**全国中等学校校長会議による諮問**

「各学校に行はるる競技運動の利害及び其の弊害を防止する方法如何」

教育者によって運動が教育問題として補足される出来事

各学校における競技運動の弊害

（イ）競技に熱中するがため往々学業を疎害すること

（ロ）遠隔せる学校間に競技するに至れるを以て徒に日子と金銭とを費やすこと

（ハ）運動過激に失するより往々選手をして疾病傷害を受けしむること

（ニ）勝敗に重きを置くが為公徳を傷害し而して紛擾の基となること

右弊害を防止する方法

（イ）対外競技は予め学校長の許可を得べきこと

（ニ）学力操行共に中等以上の生徒に非ざれば対外競技の選手とせざること

（ヘ）応援者の取締を厳にすること

（チ）平素運動時間を制限すること

8）フットボールと東京高師

ここで本題です。フットボールと東京高師はいかなるポジションにあったのかということです。

ちょうど今年、日本サッカー協会 100 年史が出されました。そこにも、東京高師の卒業生によりサッカーは全国伝播したという歴史が書かれています。中塚先生のご尽力によると思いますが、この話は定説となっています。

東京高師では、体操伝習所の設立から始まり、坪井玄道が『戸外遊戯法』でフットボールを紹介し、あるいは嘉納治五郎が運動会を作り、徐々に運動部となっていくのですが、そこでフットボールは大事な役割を担うことになります。

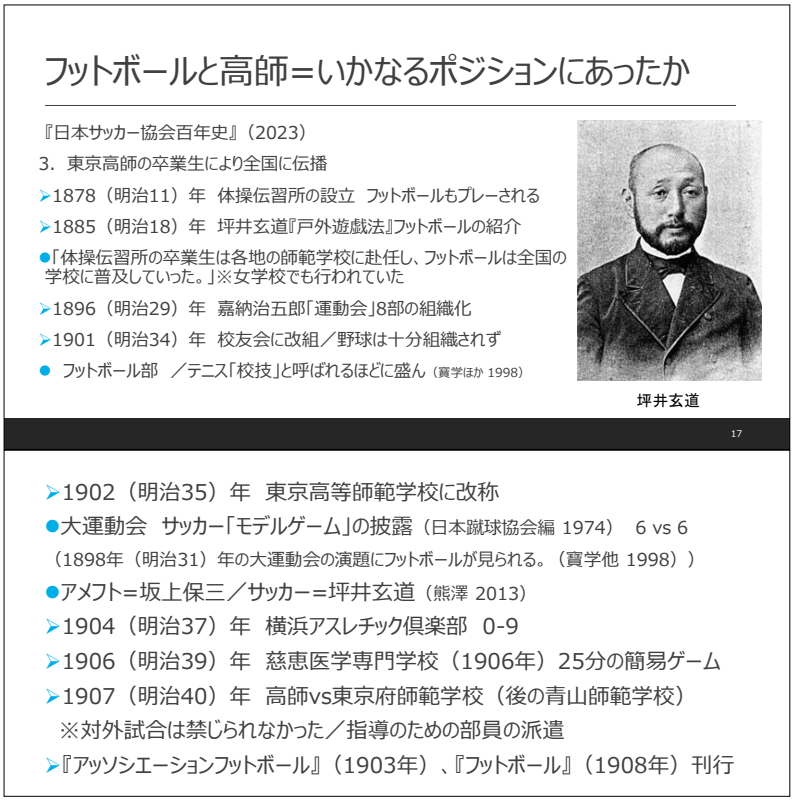
1902 年に東京高等師範学校に改称した後、大運動会が開催され、サッカーの「モデルゲーム」が行われました。この時は 6 対 6 のゲームだったようですが、フットボールは 1898 年の大運動会の演題にもみられます。このときちょっと面白いのは、アメリカンフットボールの歴史を研究されている熊澤拓也さんが書いていますが、当時はフットボールと言ってもまだ決まった形がなかったので、ラグビーもサッカーも、アメリカンフットボールもありました。アメリカから帰ってきた坂上保三にコーチを受けてやってみたけどアメフトは難しく、自分たちには合わない。だから坪井玄道先生がサッカーを奨励するようになったというようなことが書かれています。

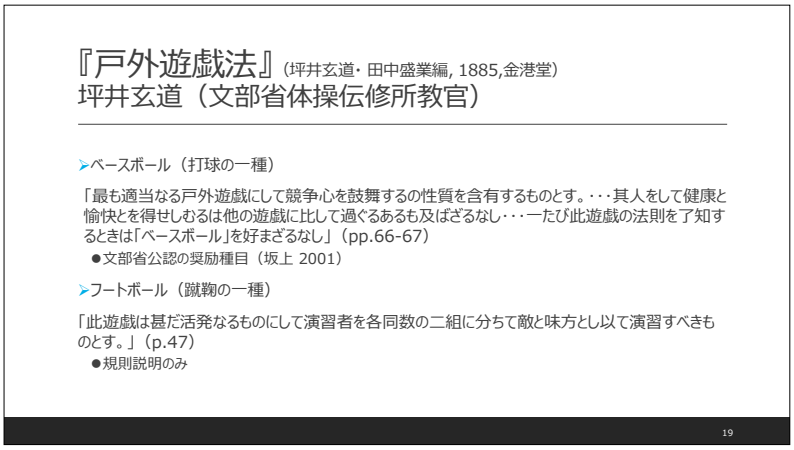
1904 年の横浜アスレチック倶楽部との試合については、先ほど中塚先生から紹介がありました。その後、高師の編集で『アッソシエーションフットボール』(1903 年) と『フットボール』(1908 年) という書籍が刊行され、ルールをしっかりと伝えていきます。

そういう作業が、このころ起きてくるということです。

先ほど紹介した『戸外遊戯法』にフットボールがどのように書かれているかというと、フットボール自体は「蹴鞠の一種」であり、「この遊戯は甚だ活発なるものにして演習者を各同数の二組に分ちて敵と味方とし以て演習すべきものとす」としか書かれておらず、その後に規則説明がありますが、フットボールの評価について坪井玄道は何も書いていません。一方でベースボールを見ると、「最も適当なる戸外遊戯にして競争心を鼓舞するの性癖を含有する」とあり、ベースボールをやった人はみんな好きなると書かれているのが興味深いですね。

後に坪井玄道は評価を逆にするのですが、当時サッカー、フットボールはよくわからないけれども、野球は人気があると捉えられていたことがわかります。スポーツ史の坂上康博さんが書いていますが、ベースボールはある意味、文部省公認の奨励種目であったと考えられ、非常に人気もあり、望むべき球技として認められていたということです。





東京高師の卒業生がサッカーを広げていく話は紹介しましたが、そのうちの 1 人が永井道明です。後に高師の教授になりますが、彼が兵庫県の姫路中学校長をしているときの様子が、和辻哲郎の『自叙伝の試み』という本に書かれています。

永井がやってきたときに、「野球は禁止ということになった。中学校の運動場が狭くて、野球ができなかったということも一つの理由であったかも知れない。が、おもな理由は永井校長が野球を好まなかったということにあるであろう。校長はその代わりにアソシエーションフットボールを奨励し、体操の時間に自分で出て来てルールを説明したり、自分がレフェリーになって試合をやらせてみたりしたのであるが、生徒たちはいっこうに乗り気にならなかった」と書かれています。

永井道明はこの後、野球害毒論争の記事にも登場しますが、「運動の本旨を忘却せる日本の野球」というタイトルが付けられているように、野球嫌いはこの当時からあったと思います。今日の日本の野球界の状態を見て「選手に堅忍持久の気なく、気が早く勝負に重きをおいてコセつき、野次が下品」である。それに対して「英国のクリケット、蹴球の競技は決して日本の如く不作法下品なるものでなくして堂々として実に礼儀正しい。負けても失望せぬ、勝っても泣いたり笑ったりせぬ」ということで、「野球をある利益の手段に利用する学校の如きに至って論外で犠牲

師範学校卒業者のサッカー指導実践
永井道明　1902（明治35）年　兵庫県姫路中学校長

「野球は禁止」

和辻哲郎『自叙伝の試み』（『和辻哲郎全集』18巻、p.281-282）

「野球は禁止ということになった。中学の運動場が狭くて、野球ができなかったということも、一つの理由であったかも知れない。が、おもな理由は永井校長が野球を好まなかったということにあるであろう。校長はその代わりにアソシエーション・フットボールを奨励し、体操の時間に自分で出て来てルールを説明したり、自分がレフェリーになって試合をやらせてみたりしたのであるが、生徒たちはいっこうに乗り気にならなかった。アソシエーション・フットボールというのは今はやっているサッカーのことである。あの勇ましいサッカーが若い者たちの興味をまるで引かなかったというのは全く変なことであるが、しかし流行しないものに対して感じを持たないということは、今も昔も変わらない日本の若者の癖だといえるかも知れない。・・・遊戯として役立ったのはただ器械体操だけであったので、おのずからそういう結果になったのであろうが、永井校長はこの傾向が見え始めるとともに、サッカーの奨励をぷっつりとやめてしまった。校長としては予想外の好結果を得てほくほくしていたのであったかも知れない。」

永井通明

にさるる学生はただ一言不憫だと言いたい」と述べています。

余談ですが、永井道明は水戸中学校時代の17歳の時にサッカーをしていた記録があります。「学友数人で乱脈な蹴球に夢中になって球を追うて平行棒の下をくぐり、誤って一足早く身を起して、高さ四尺位の樫の角に激しく頭を打ちつけて前方に躓き、一時失心・・・六針縫って帰宅・・・」と武勇伝として書かれています。

野球害毒論争時の永井道明の談話

▸運動の本旨を忘却せる日本の野球

「今日の日本の野球界の状態を見ると選手に堅忍持久の気なく、気が早く勝負に重きをおいてコセつき野次が下品である。東部米国大学および英国のクリケット、蹴球の競技は決して日本の如く不作法下品なるものでなくして堂々として実に礼儀正しい。負けても失望せぬ、勝っても泣いたり笑ったりせぬ。・・・野球をある利益の手段に利用する学校の如きに至って論外で犠牲にさるる学生はただ一言不憫だと言いたい。」

21

9）フットボールの教育的意義

先ほど出てきた1903年の『アッソシエーションフットボール』は東京高等師範学校フットボール部編です。中村覚之助の話がありましたが、そこには、フットボールゲームが非常に好ましいスポーツとして紹介されています。簡単に言うと、多くの人たちがそこでスポーツをすることができ、共同の精神を養うことができる。また、ボール1個あればできてしまうので経済的。これらがフットボールの優れたところで、我が国で盛大に行われることを希望しているということです。

これが1908年の『フットボール』になりますと、運動のために重大な目的を妨げられるようなことがあれば、運動の効果は少しもない。これは野球のことを指していると思います。学生が学課を後回しにして運動にふけるなどということがよくあるし、成績が悪いのもよく聞くことである。フットボールは、この点において最も優れた多くの特徴を持っている。競技時間に制限がある。試合が終われ

坪井玄道　序文『アッソシエーションフットボール』
（東京高等師範学校フットボール部編, 1903年, 鍾美堂, pp.1-2.）

「余は先年欧米諸国を巡遊せしが世に多かる遊戯運動の中にて甚だ盛んなりしものは「フットボールゲーム」にして中就（なんかずく）英米に於ては非常に盛んに行はるるを見たりき。由来此の遊戯は身体的方面より考ふるも亦精神上に及ぼす方面より論ずるも誠に有益なる興味ある遊戯にして特に他の遊戯に比して其人数を多く要し然も大ひに一致共同の行動を要するを以て之れ等の精神を養成することの多きは即ち之れ此の遊戯の特色と云ふべきか。且つや最も経済的なる遊戯なるを以て余は此の「フットボール」の我が国に盛大に行われんことを希望して止まざるなり。」

ばそれで終わってしまうということです。一方で野球は、ずっと続いてしまう。こういったことがフットボールの特徴として書かれています。この頃師範学校や中学校では既にフットボールが盛んに行われていることが記されています。

もう一つ資料を追加します。同じころ出された『体育之理論及実際』（1906 年）という井口あくり他の書籍です。当時の文部省体操遊戯取調委員が執筆しています。どのようなスポーツや体操が望ましいのかということや、いろいろな弊害について議論されています。共通的な結論を導くことはできていませんが、「教科として課すべきもの」として、競争遊戯、綱引き、毬送、そしてフットボールが入っており、サッカーが正課としてすべき競技として明確に位置付けられていることがわかります。

もう少し詳しく読むと、「小学校において行うフートボールの遊戯は、簡単なる規則に由るを可とす。此の遊戯は、協働・勤勉・忍耐等の諸徳を養い、観察及び判断力を進むるに適当なるものなり」と書いてあり、先ほど紹介したフートボールの特徴がここに書き込まれ、学校の正課として望ましいと紹介されています。一方、学校運動会と書かれているものはいわゆる競技会です。学校相互の選手競争は禁ずべしと書かれており、種々の弊害があることがあわせて記されています。

『フットボール』
（東京高等師範学校々友会蹴球部編, 1908, 大日本図書, p.2.）

「運動の為めに、重大な目的を妨げられるような事があっては、運動の効は少しもないと云っていい。学生が学課を後まわしにして運動にふけるなどはよくある例で、運動の選手は、兎角学科の成績がわるいとは、よく聞く事であるが、これは甚だよくない。目的を犠牲にして、手段たる運動に熱中する如きは、実に愚の極である。フットボールはこの点に於て最も勝れた多くの特徴を以て居る。・・・それは競技の時間に制限がある事である。」

「愛知県、山形県、福島県、茨城県、埼玉県等の各師範学校では、已（すで）に盛んにやっている。その他中学等でもやっている所もあるし、又始めようとしている所も沢山あるようである。」

『体育之理論及実際』（井口あくり他 1906）

- 文部省体操遊戯取調委員（清水 1996）
- 文部省の公式見解に近いものとして全国の学校に影響（坂上 2001: 136）

教科として課すべきもの（p.348-349）

「教科として課すべき遊戯は、成るべく団体的にして複雑ならざるものたるべし」

一、競争遊戯　綱引き、毬送、「フートボール」、鬼遊の類い

二、行進遊戯　十字行進、踵趾行進、方舞の類

三、動作遊戯　桃太郎、池の鯉の類

- 「フートボール」（p.351）

「小学校に於て行う「フートボール」の遊戯は、簡単なる規則に由るを可とす。此の遊戯は、協同・勤勉・忍耐等の諸徳を養い、観察及判断力を進むるに適当なるものなり。」

- 「学校運動会」（p.429）＝競技会

「学校相互の選手競争は之を禁ずべし。一学校と他学校との間に、選手競争を行う時、種々の弊害を生じること、従来の経験に徴して明なりとす。」

10) サッカーの旧制中学校への普及とその背景

以上のことをまとめて考えてみたときに、福島寿男さんが書かれた論文に行き着きます。「中学校へのサッカー普及が本格化するのは大正期になる」「この時期にサッカーを校技として導入した中学校は、過熱し、問題化した野球に代わる、エリートにふさわしい競技としてサッカーを採用したという著しい特徴があった」ことが指摘されています。

私が結論として申し上げたいことが、ここに書かれていますが、幾つかの学校の例が紹介されています。例えば広島第一中学校は、校長の命により野球部の新聞社関係の対外試合が禁止されました。サッカーの競技化への懸念です。湘南中学校でも、赤木愛太郎校長の下で野球を禁止してサッカーを校技にしています。

このように、大正年代に新しく生まれた学校の中で、野球部を作らずにサッカー部を作った事例が多くみられることが紹介されています。ただ、単純にサッカーの時代がやってきたわけではなく、野球人気との衝突が起きた事例も報告されています。例えば、大阪の市岡中学校の坪井仙次郎校長は、初代校長として野球を一切禁止していました。日本人であるために野球は適切でないと言ってミットやバットを没収しています。野球部は、彼が転出したのちにつくられます。野球をしたい生徒とそれを抑えたい校長とのバトルが起き、ストライキのようなことが起き

サッカーの旧制中学校への普及

➢福島寿男（2011）

「中学校へのサッカー普及が本格化するのは大正期になるが、この時期にサッカーを「校技」として導入した中学校は、加熱し問題化した野球に代わる、エリートにふさわしい競技としてサッカーを採用したという著しい特徴があった。」

・広島県立広島第一中学校　1918（大正7）年　校長の命により野球部の新聞社関係の対外試合を禁止　弘瀬時治校長（高師卒）→サッカーを競技化

・刈谷中学校　1919（大正8）年　羽生隆校長　イートン校をモデルとして、野球を禁止、サッカーを校技

・静岡県立志太中学校　1924（大正13）年創立　錦織兵三郎（高師）校技として奨励、野球熱が強く転勤させられる

・**神奈川県立湘南中学校　1921（大正10）年　赤木愛太郎（高師）　野球を禁止し、サッカーを校技**

・東京府立五中　1919（大正8）年創立　伊藤長七（高師）野球部を承認せず、蹴球部は1924年創部

ていく時代でもあります。和歌山中学校でも、新しい校長が赴任してようやく野球が可能となります。このような事例がみられます。

1899 年の中学校令改正後、中学校数が飛躍的に増加します。1910 年には全国で 300 校だったのが、1922 年には 400 校を超え、10 年間で一気に 100 校程度増えてきます。サッカーを校技にして野球を禁止した事例は、数としてはそれほど多くはないのかもしれません。サッカー特化型の学校は一部にとどまった可能性もあるので、一概に時代の特徴であったと言いきるのは難しいのですが、一部の学校には影響がみられたことは確認できると思います。

➢野球人気との衝突が起きた事例も（坂上 2001）
- ●坪井仙次郎　大阪市岡中学初代校長野球を一切禁止　日本人になるためには野球は適切ではない、ミットやバットを没収→転出後野球部創設
- ●和歌山中学　野村浩一校長の赴任によって野球が可能

➢1899（明治32）年　中学校令改正
- ●中学校数の飛躍的増加（安東 2009）
- ●1910年には300校、1922年には400校を超える（『明治6年以降教育累年統計』）
- ●サッカー特化型の学校は一部の例にとどまった可能性もある

➢イギリス・パブリックスクールへの注目、モデル

「日本サッカーの構造と歴史の特徴は、大正期においてサッカーが、反野球のエリートにふさわしいスポーツとして、パブリック・スクールと親和性のある中学校（進学校）に積極的に受容されたことと無関係ではなかろう。」（福島寿男 2011）

➢P.ブルデュー（フランスの社会学者）「卓越化の論理」

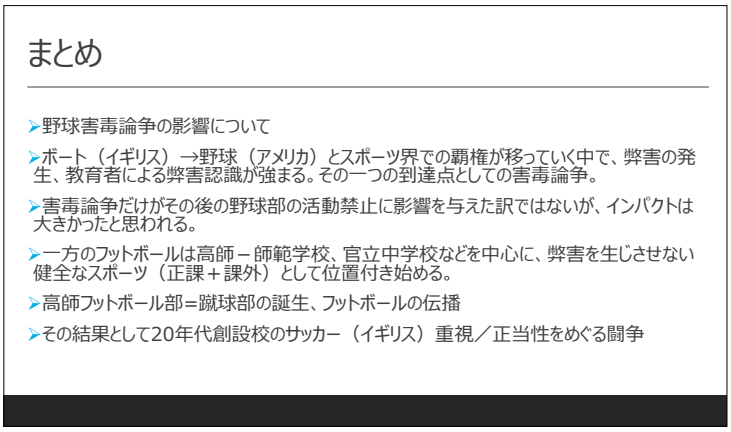
➢正当性をめぐる闘争（石坂 2002）

同じ論文ではこんなことも書かれています。当時の学校がなぜサッカーに注目したかというと、イギリスのパブリックスクールという言葉、例えばイートン校という言葉がよく出てきます。福島さんは、当時、エリートにふさわしいスポーツとして、パブリックスクールの様子を参照しながら積極的にサッカーが推奨されてきたのではないかという仮説を唱えられています。今回はこれについて検証するには至りませんでした。しかし私は、最初に紹介したボート競技が一高・帝国大学に受け入れられた背景に、イギリスのパブリックスクールなどエリート校の学生たちがやっているスポーツをそのまま日本のエリート校の学生たちが行った文脈があるとみています。フランスの社会学者、ピエール・ブルデューが「卓越化の論理」と呼んでいますが、さまざまなスポーツがある中でどのスポーツが選ばれるのかは、結果的にその時代におけるさまざまなスポーツ間の序列（闘争）の反映となっていることが指摘できます。最初にボート競技が盛んだったものの、野球人気が高まり、野球も一高に人気や覇権があったのが早稲田・慶応に移っていく。このように、時代に応じてスポーツの受容の仕方は移り替わっていきます。そうするとサッカーは、野球の弊害が認識されていく中で、取り組むべき望ましいスポーツとして、師範学校や中学校などで正課として位置づけられていった。そういう歴史の中にあるのかなというのが今回の結論になります。

11）まとめ

まとめます。まず野球害毒論争の影響について。

ボート競技から始まり、イギリスに起源を持つスポーツの人気が野球に変わっていく中で、スポーツ界の覇権が移っていきます。ところが学校において徐々に弊害がみられるようになると、教育者による野球の弊害認識が強まり、害毒論争が引き起こされたことを確認してきました。



ただ、害毒論争だけが野球部の活動に影響を与え、制限を加えていった訳ではなく、そこに至る文脈として、対校戦の過熱とそれに対する校長の対応が非常に大きな影響を与えたことを指摘してきました。もちろん害毒論争が全国紙で展開されたことは非常に大きなインパクトをもっていたと言えるでしょう。

一方でフットボールは、高等師範から師範学校、官立中学校を中心に、弊害を生じさせている野球に対して健全なスポーツとして、正課の授業や課外の活動として位置づけられた文脈があります。こうした動きが害毒論争以降に出てきたのではないかというのが今回のまとめとなります。

高等師範蹴球部の誕生とフットボールの全国伝播が始まっていくあたりに、野球害毒論争が起きていることは、非常に面白いなと思いました。その結果として、1920 年代に創設された学校の中にはイギリスのパブリックスクールを目標にしたり、サッカーの優れたところを取り入れていったりするような学校がみられたというのは、いままであまり注目されてきていなかったと思います。このことはサッカーの歴史を語る上で、研究的にも非常に面白いと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。

＜ 文 献 ＞

石坂友司 , 2002,「学歴エリートの誕生とスポーツ―帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から」『スポーツ社会学研究』10: 60-71.
石坂友司 , 2003,「『野球害毒論争 (1911 年)』再考―『教育論争』としての可能性を手がかりとして」『スポーツ社会学研究』11: 115-127.
石坂友司 , 2018,「戦前のスポーツ界の足跡―オリンピック初参加から幻に至るまで」小路田泰直・井上洋一・石坂友司編『〈ニッポン〉のオリンピック』青弓社 , 86-112.
安東由則 , 2009,「明治期における中学校校友会の創設と発展の概観」, 武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』39: 31-57.
有山輝雄 , 1997,『甲子園野球と日本人』吉川弘文館 .
秦真人・加賀秀雄 , 1991,「1911 年における野球論争の実証的研究 (Ⅰ) ―『野球と其害毒』をめぐって」『総合保健体育科学』14(1): 33-38.
本多勝一 , 1991,『貧困なる精神第 21 集　新版「野球とその害毒」』すずさわ書店 .
寶学淳郎・清原泰治・阿部生雄 , 1998,「東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究 (Ⅰ) ――明治期を中心として」『高知学園短期大学紀要』28: 9-22.
寶学淳郎・清原泰治・阿部生雄 , 1998,「東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究 (Ⅱ) ――大正期から昭和戦前期を中心として」『高知学園短期大学紀要』28: 23-32.
一高同窓会 , 1984,『向陵誌　一高応援団史』.
井口あくり・可児徳・河瀬元九郎・高島平三郎・坪井玄道 , 1906,『体育之理論及実際』国光社 .
公益財団法人日本サッカー協会 , 2023,『日本サッカー協会百年史』.
熊澤拓也 , 2013,「日本へのアメリカンフットボールの流入と東京高等師範学校」『一橋大学スポーツ研究』32: 44-53.
永井道明先生後援会 , 1951,『遺稿永井道明自叙伝』体育日本社 .
中村哲也 , 2010,『学生野球憲章とはなにか―自治から見る日本野球史』青弓社 .
日本蹴球協会編 , 1974,『日本サッカーのあゆみ』講談社 .
小野瀬剛志 , 2002,「野球害毒論争（1911 年）に見る野球イデオロギー形成の一側面――『日本的スポーツ観』再考試論」『スポーツ史研究』15: 61-71.
坂上康博 , 2001,『にっぽん野球の系譜学』青弓社 .
清水諭 , 1996,「体操する身体――誰がモデルとなる身体を作ったのか／永井道明と嘉納治五郎の身体の格闘」『年報筑波社会学』8: 119-150.
鈴村裕輔 , 2009,「野球害毒論争の社会思想史的分析」『ベースボーロジー』10: 2-47.
高橋孝蔵 , 2012,『倫敦から来た近代スポーツの伝道師――お雇い外国人 F.W. ストレンジの活躍』小学館 .
竹之下休蔵・岸野雄三 , 1959,『近代日本学校体育史』東洋館出版社 .
飛田穂洲 , 1934,『熱球三十年』中央公論社 .
坪井玄道・田中盛業編 , 1885,『戸外遊戯法――一名・戸外運動法』金港堂 .
運動術士 , 1906,『運動界之裏面』中興館 .
八木一弥 , 2023,「明治期における日本野球文化構築に関する一考察――野球害毒論争に着目して」『コミュニティ福祉学研究科紀要』21: 29-40.

ディスカッション

中塚：ありがとうございました。

ここまでは会場の皆さんには話を聞いていただく形でしたが、残り 30 分間は質疑応答、あるいは会場全体での自由な意見交換の場としたいと思います。

まず、ここまでの話をお聞きいただいた中で、ここは確認しておきたい、ここがわからなかった、もう少し聞いてみたいということがあればお受けしたいと思います。

その後、コメントをいただきたい方も会場におられますので、こちらから指名させていただき、残り 30 分を進めていきたいと思います。ここは学会ではありませんので、素朴な疑問、あるいは空想や妄想などでもいいと思います。オンラインの方も含めていかがでしょう。

菅原：神奈川県秦野総合高校で教員をしています管原と言います。サッカーの指導もしていました。

一つ質問があります。サッカー競技は進学校が強い印象があり、野球と比べてなぜだろうと思っていました。今日の説明で、野球害毒論争の後に、全人教育という形でサッカーが取り入れられてきた背景があったことは理解できましたが、もう一つ。サッカー部の顧問や教員の間では、野球部の生徒は礼儀正しく素直だけれど、サッカー部の生徒はうまくいかないとイライラしてふてくされるやつが多い、態度が悪いと言われたことがあります。私自身も学校でそう感じたことがあります。そのルーツについて、歴史的に何か研究として思いつくことがあるでしょうか。

石坂：現在のサッカー部の特徴がどういう形で出てくるのかについては探求すべき大きな課題だと思います。例えば過去に野球は弊害を生み出していますし、1930 年代にかけては興行化し、入場料をとってお金を生み出すようなスポーツに変わっていきます。その一方で、そういうものが認識されてくると、弊害の部分を抑えようとします。1930 年代になりますと「野球統制令」が出ますので、そういう意味では教育として野球をするという観点が非常に強く出てきたのが野球界ではないかと思

います。これに対してサッカー界では、教育的観点から何かを縛って逸脱させないようにするというよりも、サッカーをすること自体が教育的にいいことなので、自由にやりなさいという形になっていったのではないかと感じます。少なくとも戦前はそうだったと思います。それが戦後、どのように変わっていったのかはわかりかねますが、野球では学生野球憲章があるので、何かするとすぐに処分される。こうしたことが影響しているのではと感じます。漠然とした答えですが。

中塚：先ほど、JFA 発行『日本サッカー協会百年史』の話がありました。会場にお越しの国吉好弘さんが、高等師範からサッカーが伝播していったあたりを書いておられます。パブリックスクールをモデルとした旧制中学のことにも言及されています。野球とサッカーの体質の違いなどについてコメントがありましたらお願いします。

国吉：年代が違うのではないでしょうか。野球とサッカーがスポーツとして取り入れられた時代と、野球部・サッカー部の生徒の、不良じゃありませんが、そういった生徒が多いという傾向は、なんとなく風潮としてあったとは思いますけど、もう少しあとの話のような感じがします。サッカーにしても野球にしても、入ってきたころはエリート学生しかやってはいなかったと思います。そこはちょっとずれがあるような気がしますね。

中塚：ありがとうございます。石坂さんの話にもありましたように、害毒論争が東京朝日新聞紙上で連載され、要するに行き過ぎの部分がクローズアップされた。それを今度は、系列の大阪朝日が主催する大会で、より良いものに育てていくという方針で、つまり極端な言い方をすると、朝日新聞の考える「学生野球のあるべき姿」をメディアを通して伝えていった。それが、行き過ぎていた野球を品行方正な野球の方向に持っていったということは言えるのではと思います。

赤坂：阪南大学の赤坂と申します。貴重な講義ありがとうございました。私は最近サロン 2002 に入りましたて、オンラインで参加されている橘先生と一緒に、審判も現役でも一緒にサッカーをやらせてもらった仲で、懐かしいなと思っています。感想と質問をさせていただきます。

感想として、これだけエリートを育てる、協働・忍耐がサッカーで鍛えられると言われているのに、逆に品位を問われるような事件がサッカー界では多いと感じます。私もいま審判としてＪリーグに関わっておりますが、勝利至上主義の影響なのか、どうしてサッカーが逆に荒れてしまっているのかについて皆さんと、懇親会で話ができればと思います。

質問は、野球害毒論争があってサッカーがエリートのものとしてパブリックスクールをモデルに東京高師から全国に伝播したわけですが、中塚先生のスライドにありましたけど、もとはモブフットボールで、村同士の戦いです。どちらかというと中流、もしくは労働者階級の皆さんがフットボールをやっていたのがイギリスの原点ではないかと考えます。それが日本に伝播する中で、フットボールがどのように浄化され、きれいな形のフットボールとして伝わってきたのか。坪井先生などの入門書には、海外の文献を訳し、入ってきたものを伝えたはずです。伝えられた方がフットボールのきれいな部分を持ってきたからなのか、それともイギリスにおいてもフッ

トボールは労働者階級からエリート層までたくさんの階級が取り組んだと思われます。どういう形でフットボールが持ち込まれたのか、きれいな部分だけが持ち込まれたのかというところが疑問に思いました。

中塚：ありがとうございます。いまの質問についてコメントをお持ちの方があればご発言ください。筑波大学特任教授でスポーツ史研究の第一人者の真田久さんが会場におられます。真田さん、いかがでしょうか。

真田：今日は貴重な話をありがとうございました。筑波大学の真田と申します。いまの赤坂先生のご指摘についてですが、東京高師に入ってくる時には、教員養成の中でいかにそれを生かせるかということが意識の中にあったと思います。ですから、そこの部分にまず重きを置いたフットボールとなり、それから大学スポーツに取り入れていったのではないかと思います。そこから発信されたものは、人間形成に役立つというような意識は当然あったのだろうと思います。

それから野球とサッカーの話がありましたが、東京高師蹴球部は意識的に地方に広げようという卒業生が多かったと思います。ベースボール、野球については、そういうデータは東京高師の資料をみてもあまり見当たらなかったという印象です。もう少し調べてみないとわかりませんが。

それから私は水泳部の OB として水泳の普及についても調べています。水泳は嘉納治五郎が直々に作った部なんです。やはり全国的に広めようということで、高等師範学校で 2 級をとったら全国各地の指導に行ってよいということでした。そして全国の中学校や師範学校に教えに行っているんです。このような東京高等師範学校の中でも、運動部によって向き合い方、広げようという意識などの違いがあったのではと思います。もしかしたら野球人にそういう人があまりいなかったのかもしれません。そのあたり違いが、広がった先の様々なところにつながるのかもしれません。そういう感想を持ちました。まだよく調べていないのでわからないことでもありますが。

石坂：先程の話に戻ると、サッカーは階級のことを考える必要があります。イギリスには階級制度がありますので、労働者階級がやっていたフットボールもありますが、それとは別にパブリックスクールの、特に上流階級の子どもたちや、中流の上層の子たちを学校の中でいかにエリートとして教育をしていくかというところがあります。パブリックスクールは公立の学校でなく、私立の学校ですので、各学校が持つ教育理念の中で若者たちにどのような教育をしていくかという中で、サッカーやラグビーが混ざったようなフットボールが行われていたと言われています。それがルール化してサッカーとラグビーに分かれていきます。ですので、大衆的なスポーツとしてのサッカーが日本にそのまま入ってきたのではなく、まずパブリックスクールの中でルール化され、それが日本に伝播してきたと思います。日本に伝えられたころ、ちょうど 1900 年前後にヨーロッパに行った人たちは、おそらくプロ化し、クラブが組織化され、そこに労働者階級がプロとして活躍し出すような時代のサッカーも見ているでしょう。あるいはパブリックスクールで行われている教育としてのサッカーも見ていると思います。どちら

かというと後者、パブリックスクールで行われている教育というものを日本に紹介したのではないかと思います。

それから真田先生のお話にもありましたが、それぞれの部で受容の仕方が違うという意味では、先ほど紹介したボートもそうです。高師はいち早く新艇を作り、それで一高に勝つんです。隅田川で勝負して高師が勝つのですが、それは艇が良かったからです。ただ、ボート部としての活動はほとんど記録がありません。何となく楽しみの中でみんながやっていたということでしょう。部として登場するのは 1903 年です。この例からも活動のバリエーションが、部ごとにさまざまであったと言えるでしょう。

高等師範はテニスも校技と言われるぐらい盛んだったと言われています。坪井玄道は確か野球部の部長でもあったと思います。こういうことから、野球嫌いの坪井玄道が野球部長もしていたということで、野球が奨励される流れにはならずに、野球の発展が少し遅れてくるというか、サッカーが推奨されるのとは異なる流れになったのではないかと思います。

中塚：東京高師の部ごとの特徴で言うと、蹴球部の卒業生は全国各地に赴任してサッカー部をつくりますが、赴任先の学校を高師に招いて招待大会もやっています。これがかなり大規模な大会で、少なくとも東日本の学校にとっては全国大会という意識で臨んでいたことが部誌からみられます。

部誌には、柔道剣道もそういうことをやっていたということが記されています。つまり、卒業生が全国に赴任して柔道剣道を広め、それらの学校を招待する全国大会が行われていたということです。予選をやっている訳じゃないので、厳密な意味での全国選手権ではありませんが、その大会を目標にしている旧制中学校の部活動の子どもたちが大勢いたということは言えるのではと思います。ちなみに、高等師範主催のいわゆる全国大会で、附属中は連戦連勝。一度だけ優勝を逃したときは、志太中、いまの藤枝東に優勝を持っていかれたというような記録がございます。

ほかの方からご質問やコメントはいかがでしょうか。

ではこちらから逆に、ご発言いただきたい方をお二人指名させていただきます。先ほどの話の中でも申し上げましたが、2024 年は附属サッカー 100 周年であると同時に、東京府立五中、小石川高校も 100 周年を迎えられます。先ほどのスライドの中にも五中の初代校長、伊藤長七の名前が出てきました。いま 100 周年事業を中心的に担っておられる越部良一さんがいらっしゃいます。コメントをお願いします。その次に附属 OB 会である桐窓サッカー倶楽部会長の菅原博さんからもお願いします。

越部：小石川高校サッカー部 OB 会を紫礫会（しらくかい）と呼び、そこで事務局をやっております越部と申します。興味深い話が次から次に出てきて楽しく聞かせていただきました。

お話にありました伊藤長七先生。1919（大正 8）年が五中のスタートで、初代校長です。サッカーが相当お好きだったようです。その 6 年後の 1924（大正 13）年に、五中蹴球部が誕生し、初代部長がやはり高師出身の吉木（よしき）利光先生でした。それから 100 年後の 2024 年を来年に控え、いま 100 周年記念誌を作成しているところです。10 年史、20 年史も出ていまして、そのまま 50 年、80 年、そして今回の 100 年史という流れになります。10 年史、20 年史は負けの連続というか、どこまで勝ったというよりもここで負けたという記録ばかりで、そういう重みをすごく感じています。

先ほど話されていた野球とサッカーのことでは、五中は小さなグラウンドだったと思うんです。ですから、10 年史の中でよく言われているのは、野球をするスペースがなかったのでサッカーを始めたということです。いま見返すと、学校としては、野球部は認めないが、蹴球部は認めるということだったのかもしれません。実際、狭いグラウンドに大勢の人数がいくつものボールを蹴りあっていたようです。リーダーシップをとっていたのは、小学校の時に既にサッ

カーをやっていたメンバーだったようです。附属小学校がどういう形だったのかは私にはわかりませんが、今日のお話を聞いて、小学校でもサッカーを普及していこうという動きがあったのかもしれません。

話は変わりますが、10 年史「誕生十年」の復刻版を審判の長坂幸夫先生がお出しになっています。

先生の叔父様、長坂謙三氏は五中蹴球部初代主将でした。先生は、初代部長吉木先生のお言葉に深く感銘を受けられたとお聞きしています。この原本を探したのですが、なかなか見つかりませんでした。そこで、先生にお尋ねしたところ、今日の会にもご出席の審判研究会の方々にお声を掛けて頂きました。インターネットをはじめ、いろいろと探していただき、ついに、探し出して頂きました。心より感謝しております。今回は、この本を含め、記念誌をウェブに上げて皆様にもご覧いただければと考えています。

本日は、本当に有難うございました。

中塚：ありがとうございます。ちなみに小石川の 50 年史と 80 年史は桐陰会館に持ってきていますので、あとで手に取ってみていただければと思います。では菅原さんお願いします。

管原：筑波大学附属高校サッカー部 OB 会長の管原です。現役で 71 歳ですが、サッカーやっています。サッカーは得意です。100 年間の総括をさせていただいていますが、非常に難しく、どういう切り口でどこから総括したらいいかというのがまだ自分の中でまとまっていない状態で、皆様のご尽力を得ながら、なんとか 100 年を総括したいと思ってやっている最中です。

感想を述べさせていただきます。野球はどうしてもお金がかかるんじゃないかと思ってお聞きしていました。サッカーはボールが一つあれば誰でもできます。また一人でもやりやすい。野球は人数がまとまらないとできないと思っています。

それから、阪南大学の先生のご指摘にありましたように、野球害毒論ではなく、いままさにサッカーの害毒論が言われているんじゃないかと感じております。自分が育った時代は文武両道の教えで育ってまいりましたが、いまの時代にそれを求めるのは難しいかもしれません。要するにエリート教育が変わってきているというところで、根源から変わっているように思います。

附属高校のサッカー部の話で言いますが、私以降の 50 年間は中塚先生が 30 ～ 40 年やってきていただいた歴史があり、そこをこれからどうやって総括していくかというのが大きな課題であると思っております。いろいろなことを考えていますが、部活動のあり方そのものが変わってきています。今後のあり方を考えながら、皆さんと議論する中で、附属サッカーの 100 年を総括したい、そんなふうに思っております。感想を述べさせていただきました。よろしくお願いいたします。

中塚：ありがとうございます。附属 100 周年事業の一つとして、週明けの月曜日に OB サッカーを、駒沢のグラウンドを借りて企画されているんですよね。

管原：週明け月曜日の午前中に、駒沢公園グラウンドで、65 歳以上の方々にお越しいただき、100 周年記念の交流戦をやります。参加していただくのは、定期戦をずっとさせていただいている学習院高等科と湘南高校。そして中央大学附属高校。中央大学と筑波大学の定期戦の前座試合として高校の定期戦をさせてもらっていました。いまはなくなったと聞いております。それから自由学園の皆さん。東京教育大学附属のころお世話になっており、中学の頃からずっと親しくさせていただいております。遠方からは、宿敵の神戸高校と広島大学附属高校。この 6 校に本校を加えた 7 校の 65 歳以上の方で半日間、サッカーを楽しむことを予定しています。

会場に来られない方もますが、皆さんがそれぞれの地域で、家庭のご理解を得てサッカーに深く携わって来られたからこそ、いまのサッカー界があるのだと思っています。それをみんなで讃えあいましょうという会にしたいと思っています。

中塚：ありがとうございます。このような企画に続いて 2 月 23 日には記念式典が予定されているということです。

そろそろ締めの時間になってきました。最後に石坂さんと関さんからコメントをいただきたいのですが、その前にお一方、紹介させていただきます。今日はこの会場の 2 階で、同時刻に並行して、新制附属中学校の元教員の集まりが開かれていました。中学社会科・歴史の先生で、副校長を務められた山口正先生が、附属の歴史をさまざまな角度から調べておられます。山口先生が来てくださいました。2 階の資料室の紹介も含めてお願いします。

山口：附属中学で副校長を務めました山口と申します。定年になって 10 年以上経ちますので、いまの学校のことはよくわからないんですが、歴史のことだけはいろいろ知っております。石坂先生の話の中に伊藤寒水（かんすい）が出てきました。伊藤長七、伊藤かんすいと言いますが、彼のことをちょっと伝記で書いたことがあります。その息子さんがこの学校の卒業生でサッカー部にいたんです。なんでサッカーをやるのかわからなかったんですが、先生のお話を聞いて、小石川高校はそういう学校だったんだな、だからサッカーをやっていたんだなということがよくわかりました。ありがとうございました。

この後は懇親会があるようですが、準備が整うまで時間があるようです。2 階の資料室をご案内します。サッカーだけでなく、この学校の昔からの資料、嘉納治五郎先生をはじめいろんな方のもの、嘉納治五郎先生の奥さんの須磨子さんのお父さん、義父ですね、竹添進一郎先生の書があります。あるいは国粋主義を唱えた杉浦重剛の書などもありますので、一緒に見ていただこうと思います。真田先生の方が詳しいのですが、恥ずかしながら私も説明なんてさせていただきます。よろしくお願いいたします。

中塚：どうもありがとうございました。では最後に石坂さん、関さんから、ラストのコメントをお願いします。

関　：越部さんのお話で小学校からというのがありましたが、その話が抜けていたなと思いました。神奈川の横浜師範から入ってくる子はサッカーをやっていました。それ以外のほとんどの人がやっていなかった記録が残っています。そういう視点が欠けていたなと思います。

戦前のことを考えると、卒業後、上に行っても大学までですね、サッカーをやっているのは。社会人のチームは、神奈川県サッカー協会の歴史をみてもほとんどありません。サッカー協会を作ったといっても旧制中学のメンバーと、ごく一部のクラブみたいなところです。いまや OVER-80 までリーグをやっているような時代と、そのころの資料の読み込み方には気をつけないといけないと思っている次第でございます。ありがとうございます。

石坂：今日はお招きいただきありがとうございました。20 年ぶりぐらいに資料を見返したりしましたが、この 20 年で本当に便利になったと思いました。昔は図書館に行って本や雑誌をめくらないといけなかったのですが、いまは国会図書館につなぐだけで、インターネットで資料が全部見られます。こういう時代ですから、いろんな資料を発掘しながら全体像を見ていくことができて、面白い研究ができるなと思いました。

今日紹介した史料はサッカーの目線からではなく、野球であったり、自分が研究してきたボートのネットワークの中でどのように論争が起きたりしたのかを捉えたものです。日本のスポーツ界の歴史を考える時に、サッカーがプロ化するまでなかなか日の目を見なかった、しかしその中でも力を尽くした方々がいて、そちらから歴史をみていくことがとても面白いと感じました。今日のようなイベントもそうですが、もう少しサッカーの研究が深まればいいなと、学問的な観点からも思いました。

もう一つお聞きをして面白かったのは、私も実はサッカーには関わっていて、小学校からサッカーをやっていました。いま大学サッカー部の顧問をしていますが、サッカーと野球を比べた時に、野球は体罰をするなど指導者のトラブルが結構多いというイメージがあります。サッカーは、体罰問題が比較的起きづらいという文脈もあると思っていました。首をかしげている方も多いようですが。これがサッカーの方々が集まると、先ほどどなたかがおっしゃったように、弊害が大きいというような認識になるのがちょっと不思議だなと思いました。野球やサッカー、いまはバスケも人気ですが、そういうスポーツの価値観というか、日本人がその競技をどのようにみてきたかという歴史をたどるのも面白い研究になると思いました。

最後に一点だけいいですか。附属と湘南高校の対校戦についてです。お互いライバルとして、この試合にどういう意味づけをされていてお互いをみていたのかという話がなかったので、お伺いしたいなと思います。

中塚：ありがとうございます。配布資料の定期戦の結果一覧を見てもらっておわかりのように、戦後すぐは附属が優勢でしたが、私が着任した年、1987 年は 0-6 で大敗。そのあたりから黒星続きでずっと来ています。湘南はいろいろある試合のうちの一つのような感じで、しかしこちらは「湘南戦」に相当な気合いで「今年こそは」と臨むのですが、なかなか勝つことができないの繰り返しです。ただ、卒業後、彼らは同じ大学でチームメートになったり、あるいは同じ会社で一緒に働いたり、そういういい仲間になっているという話はお聞きしています。藤塚さん、そんなところでいいですか。

藤塚：勝ち負けは置いておいて、サッカーの後に必ず交流会を企画して、選手同士が試合の後、お茶菓子を食べながら交流をする機会があります。ゲームだけでなく、いい交流がこれまでも続いてきましたので、これからもぜひ応援していきたいと思っています。そんなところです。

中塚：ありがとうございます。ということで少し時間を過ぎましたけど、シンポジウムはここまでにさせていただきたいと思います。

今日の話はあくまでも出発点にすぎません。今回のシンポジウムをきっかけにして、いろいろな研究につなげたり、次の世代に語り継いでいく必要があると思います。この後は同じ場所で、引き続き語り継いでいくことができればと思います。オンラインの皆さんも含め、ご参加いただきありがとうございました。登壇者のお二人に、改めて大きな拍手をお願いします。

100 周年記念事業　定期戦等関係校 OB 交流マッチ
2023 年 11 月 27 日　駒沢補助グラウンド